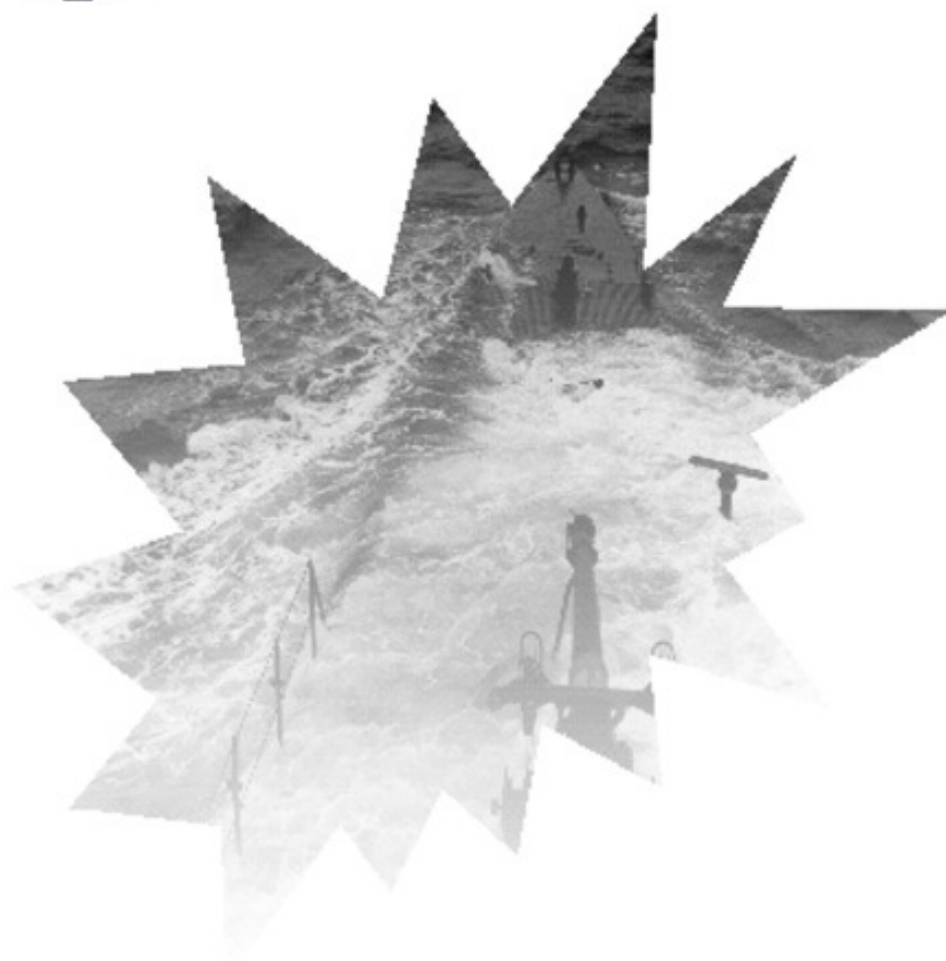


海霧



木村長門

「順子、浩平、どうだいこの雄大な景色は」

「うん、すごい」

8歳になる浩平は目をまるくして窓から景色を眺めていた。

「すばらしい眺めね。ありがとう、あなた」

「喜んでもらえてうれしいよ」

佐々木洋次は結婚十周年のお祝いに、家族をセスナに乗せて大空からの景色のプレゼントと考えていたのだった。洋次は趣味でセスナの飛行倶楽部に所属しており、アマチュアとして約15年のキャリアを誇っていた。現在33歳。一番人生で充実している時をすごしていた。15年の飛行時間は約1000時間を越えていた。と、いってもその半分以上は結婚までの5年間に費やしたものだ。結婚後は月に1、2度の乗る程度だった。

「セスナ201、こちら管制塔」

「はい、201、現在高度5000フィート、針路060、速度120ノット」

「201はまもなく米軍の飛行区域にはいる。針路を変更せよ」

「了解、針路180に変更」

「了解」

「どうしたのババ？」

「管制塔からもうじき米軍に飛行区域に入るから、危険だから針路を変えてくださいとさ」

洋次は浩平の方を振り返りながら言った。

「ふーん、そしたらトムキャットが見えるかな」

「かもな」

洋次は家族を乗せているあまり夢中で針路を変更する地点を忘れていたのだった。洋次は旋回して針路を180にとった。このまま10分程飛んだら、針路を270に変更し20分後、針路0で飛行場に帰還する飛行予定だった。

「ババ、今どのくらいのスピードで飛んでるの？」

「今は120ノット、つまり220キロで飛んでいる」

「それじゃ、新幹線より少し遅いぐらい」

「そうだな。競争したことないけど」

「でも、そんなスピードで飛んでいるとは思えないな。景色が変わらないんだもん」

「ほんと」

順子も変わらない雄大な太平洋の景色をのんびりと眺めていた。

「もう少し高度をあげてみるか」

と洋次は、徐々に高度を上げていった。高度計の針が回転を始め、5,000フィートから

5,500、6,000と指していった。高度計は8,000フィートになっていた。メートルに換算すると高度2,400メートルちょっとである。

「さあ、旋回を始めるぞ」

洋次は、旋回すると右手に日本がよく見えることを知っていた。演出のために上昇したのだった。これ以上高く飛ぶのは高山病のことを考えなくてはならないので、控えたのだった。しかし、その時浩平は何かを見つけたらしい。

「パパ、あそこに何か飛んでるよ。それも変な形？」

「えっ？どれどれ」

洋次は飛行モードをオートパイロットにして、座席横にセットしてある8倍の双眼鏡を取り出し、その方向を見た。

「うーん、ドーム型だ。距離は結構遠いな。約15°ぐらいあるかな」

「僕にも見せて」

浩平は双眼鏡を受け取ると、眼にあてて見回した。

「あっ、ほんどだ。ねえ、UFOじゃないの？」

浩平はそんな形の飛行機はないからUFOだと信じたようだった。

「でも、UFOって素早く動いたり、光ったり、消えたりするって聞いたことあるけど」

「近づきたいが、でも無理だ」

「向こうの高度は多分2万5千フィート位かな。酸素マスクもなしでそんな高いところへは飛べない」

「欲しいなあ。せっかくUFOと遭遇できたチャンスなのに。これがトムキャットだったらよかったのに」

「浩平、無茶言わないの」

「でも、出来るだけ近づいて見よう」

洋次はオートパイロットをマニュアルに戻し、さらに上昇を始めた。

その少し前、米軍の早期警戒機はレーダースクリーンに民間航空機を写しだした。洋次

の操縦するセスナだった。

「こちらレッドイーグル、イーグルワン応答せよ」

「イーグルワン、感度良好」

「イーグルワン、三時方向、30マイルに侵入機がいる。排除せよ」

「了解、レッドイーグル。目標排除します」

レッドイーグルの中では米軍のフォックス准将が同乗しており、今回の行動はある軍事機密の行動であった。そのためには、不審な民間航空機は排除せねばならなかった。民間航空機といっても、旅客機は各航空会社に通達がいており安全であったが、セスナ機等の飛行までは徹底していなかった。そこに偶然ではあるが洋次の操縦するセスナが飛行していた。といっても、管制塔から米軍の飛行禁止区域に近いことを警告されたいた。それを避けるために変針したのだったが、ある軍事機密の一部を見てしまったのだった。だが、それが、軍事機密であったことは当然知るよしもなかった。

「イーグルワンからイーグルトゥーへ目標に向かう。援護しろ」

「了解、イーグルワン」

イーグルワンはレーダーをONにした。目標らしきものが点滅していた。1分もすると高度約1万フィートで飛行しているセスナが確認できた。

「こちらイーグルワン、ターゲット確認」

パイロット・ウィリアム中尉はターゲットが民間セスナであると確認した。

「レッドイーグルどうぞ」

「どうしたイーグルワン」

「ターゲットは民間機の模様」

「それはスパイ機だ。かまわん。撃墜しろ」

「了解、撃墜します」

ウィリアム中尉は高度を1万5千フィートから1万2千フィートに下げ、セスナの後方につくように機首をめぐらせ、速度もマッハ0.9まで落とした。

(サイドワインダーを使うまではない。機銃で十分だ)

照準機をONにし、機銃の安全装置を解除した。照準機のクロスにセスナが重なりあってきた。発射ボタンを押そうとした。

「イーグルワン、セスナに子供が乗っている」

のイーグルトゥーからの声がヘッドホンから聞こえた。だが、ボタンは一瞬だが押された。
「子供？」

機銃は毎分三千発を発射するものだ。その一瞬でも数十発の弾丸が目標に向かって発射された。ウィリアム中尉は機体をすべらせた。

浩平は後ろを見た。米軍のトムキャットが後方に飛んでいた。

「パパ、トムキャットがいるよ」

「エッ？」

洋次は後方を見ると、トムキャットが二機近づいているのが見えた。その内の一機は後方に位置するように行動していた。

（まさか、飛行禁止区域に侵入してしまったからか？それは、ないはずだが）

洋次は若干後ろを見ようと機体をすべらせようとした。そのとき、光がチカチカと見えた。その光はあっというまに前方へと姿を消したが、後方に撲られたような衝撃を受けた。破片が飛び散って下方に落ちていくのがチラリと見えた。

洋次は操縦桿が重くなり、自由にきかないことを感じた。垂直尾翼が半分ほど吹き飛び水平舵も右側がなくなっていた。主翼の一部も破損しており、破れた破片が風で揺らぎ音をたてていた。エンジンは大丈夫だったが操縦は不能だった。

洋次はマイクのスイッチをいれた。

「こちら、セスナ201。メイデー、メイデー！操縦不能」

「こちら、か ん せ い」

レシーバーからの音は雑音でほとんど聞き取れない。それは、管制塔でも同じで何か異変があったことはわかるが、何も聞き取れなかった。それは、トムキャットが散布していたチャフのせいだった。電波が攪乱されていたのである。管制塔のレーダーにもセスナの航路は写しだされていなかった。

洋次はSOSをしながらセスナを安定させようと必死に操縦していた。高度は徐々に落ちていく。尾翼がやられている関係で旋回はできなかった。その操作をすればおそらく回復不可能となって墜落するだろう。

後を振りむくと、妻の順子は顔面蒼白となって、浩平を腕に抱いて怯えていた。

（これはいかん）と洋次は思った。

「順子、順子！」

「は、はい」

順子は気を取り直して洋次の呼ぶ声にこたえた。

「座席の下に救命胴衣がある。浩平に着せて、お前も着けろ。早く」

「はい」

順子は浩平から腕を外すと座席の下を探り始めた。

(あった)

順子は救命胴衣を座席の下から出すと、手を震わしながら浩平に着けて、それから自分も着けた。ふと外を見ると海面が急に近くになっていたのに気がついた。

「あなた、着けたわ。だ、大丈夫？」

ちらりと洋次は後ろの二人を見た。

「大丈夫だ」

と言ったものの、洋次は不安でいっぱいだった。当然のことながら洋上で着水はやったことがない。しかもセスナはまともに飛行できない。ここは自分の持つ技術を出し切るとななかった。

「顔を伏せて両手で頭の後ろを押えているんだ」

「はい」

高度はもう500フィートをきっていた。海上不時着の緊急用に備えてあるゴムボートを思い出し、レバーを引いた。海上にゴムボートが落下していった。機を水平になんとか保ったまま、高度を下げていった。300、200、100。機首を少しあげ気味にする。なかなかいうことをきいてくれないが、海面が迫ってくる。

ザァァ

水飛沫があがり着水した。洋次は周りを見た。なんとか浮いていた。

「順子！浩平！大丈夫か？」

洋次は救命胴衣をとりながら後を振り向き、二人の様子を確認した。

「えっ、大丈夫よ」

「脱出するぞ。その左側の赤い脱出レバーを引いて」

ドアは簡単に開いた。三人は海上に脱出した。

「すぐ、セスナは沈む。巻き込まれないように離れるんだ」

三人はセスナから10メートル程はなれた。そして機を見ると、上部しか海面上に出ていなかった。垂直尾翼はやはり上部が吹き飛んでいて、見る影もなかった。

ブクブクという音をたてて、機は海中へと姿を消した。

「ゴムボートを落としたからどこかにあるはずだ」

と言って、洋次は機の飛んできた方向を探した。波間に赤いものがチラリと見えた。

「あそこだ。二人とも泳げるか？」

「大丈夫だよ、パパ」

三人はゴムボート目指して泳ぎ始めた。

「こちらイーグルワン、レッドイーグルどうぞ」

「どうした。イーグルワン」

「ターゲットは落としました」

「乗員は？」

「脱出したようです」

「わかった。イーグルワン帰還せよ」

「了解。帰還します」

「准将、どうしますか？」

フォックス准将は数秒考えた後、命令を下した。

「近くに潜水艦がいるはずだ。探してすぐ捕まえろ」

「わかりました。第6潜水隊司令官マイヤー少将に連絡します」

「わしが、直接話そう」

「准将、電話が繋がりました」

「私だ。マイヤー君」

「これは、フォックス准将。お久しぶりです。で、急な用件で」

「実は、緊急事態が発生した。軍事機密が見られてしまい、追っていたのだが、海上を漂流しているらしい。すぐ、近くにいる潜水艦に拾ってもらいたい」

「そんなこと。おやすい御用ですよ。至急手配します」

「よろしく頼む」

マイヤー少将は近くにいる潜水艦シーライオン号に連絡した。

通信士フンラク少尉は司令部からの通信を受け取った。

「艦長。マイヤー少将からの至急電です」

コールウエル大佐はその電報に眼を通した。

「不時着した飛行機の乗員を確保する。位置は350825だ」

航海長のサッチ少佐が位置を海図で確認していて、コンパスをあてている。

「ここから10時方向。40マイルです」

「わかった。針路340。速度16。深度100（フィート）だ」

「アイ、アイ、サー」

ゴムボートに妻と子供を乗せた洋次は、自分も乗るといっきに力が抜けた感じでへたり込んだ。青い空と太陽がまぶしかったが、こんなひどい記念日を過ごすのはもちろん初めてだった。しばらくぼっとしていた。

突然風が吹いてきた。空も真上だけが黒い雲に覆われていた。波も高くなり、向こうに渦らしきものができているのが見えた。

「あなた、嵐かしら」

「いや、周りは天気がいい。ここだけ変だ？」

洋次は何年も飛行機に乗っているのに、こんな変な気象条件は初めての経験だった。

「パパ、渦が段々近づいてくるよ」

「う、うん」

ついにその渦はゴムボートを飲み込み始めた。雷鳴も轟きはじめている。

「パパ、怖いよー」

「しっかりと、パパの体を掴んでいろよ」

洋次は妻の体も寄せて腰をしっかりと掴んでいた。ゴムボートは渦にまかれるように回転を始めていた。海の底に吸い込まれるように下に沈んでいった。ゴムボートは海面から消えていた。後は何事もなかったように静かな海となっていた。

三人は海に飲み込まれて沈んでいったのに息苦しさは全然感じなかった。上を見ると海面を通して、青い空と眩しい太陽が見えていた。三人はいつの間にか意識を失っていた。

何時間たったろうか、三人の乗ったゴムボートは波に打ちあげられ白い浜辺にあった。浩平が一番最初に目を覚ました。目をこすりながら、周囲を見回した。青い空、眩しい太陽、白し砂浜、向こうには緑豊かな樹木が視界にはいった。それと、パパとママ。

「パパ、ママ！起きて！」

浩平は二人を揺り動かして起した。

洋次と順子は目を開けた。眩しい太陽に眼がくらみ、一旦眼を閉じたあと、ゆっくりと

開けていった。白い砂浜と緑に覆われた木々が視界に入った。

(不時着した近くには島などなかったはずだが)

洋次はそう思いながら、腕時計を見た。不時着から一時間ほどしかたっていなかった。

(?ここはどこだろう)

「とりあえず、島を歩いて見よう」

浩平はもうゴムボートから降りて、砂浜を小走りで走っていた。洋次と順子も続いて降りて歩いていった。服もまだぬれており、そう時間がたっていないのは明らかだった。

「この島なんていう島かな、あなた」

「いや、まったくわからない。不時着した付近には島はないし、伊豆諸島までは何日もかかるほど遠いからね。見たことも聞いたこともない島かも」

「映画じゃないんだから」

「でも、説明できないことだよ。ミステリーだ。これは」

潜水艦シーライオン号は不時着地点から一マイルの地点に到着した。レーダー担当のロバート少尉は少し前に海面に浮かんでいた飛行機は海中に沈んでいったことを確認したと告げるとともに、海面にはほかに何も浮かんでいないと報告した。

「ハイレベル温度感知センサーも異常ありません。ただ数分間嵐のような磁場が発生したようです」

「どういうことだ」

艦長コールウエル大佐は首をかしげた。これはもう潜望鏡で肉眼監視するしかない。

「ソーナーは？」

「異常音ありません」

「浮上する。メインタンクブロー。潜望鏡深度」

「アイアイサー、潜望鏡深度。メインタンクブロー」

圧縮空気で海水が噴出する音が聞え、潜水艦は三百フィートから六〇フィートまで浮上を始めた。

「潜望鏡深度です。レーダー、ソーナー異常なし」

潜望鏡が上昇し、コールウエル大佐は眼鏡にとりついて、三六〇度一周をくまなく見渡した。さらに、反対方向に回った。結果は同じだった。サッチ少佐に見てみるよう促した。

少佐は同じようにぐるりと見ていた。そして、終ると潜望鏡を降ろした。

「何も見えないし、何もありません」

「そうだ。ゴムボートはどこにいったんだ」

艦長コールウエル大佐はどう報告したものか、考え込んでいた。

ビッビッビッ！

緊急用非常ベルがなった。

「未確認航空機が接近中です」

「何だ？」

「識別可能できないものです。二時方向。距離十マイル。速度百八十ノット」

「百八十ノットだと？レシプロ機か？」

「今確認しているところです。・・・レシプロのようです。しかも双発です」

「うーん。民間機か？」

「艦長。新しい目標が現れました。集団音です。四時方向。速力三〇ノット。フリゲート艦のようです」

「日本の自衛艦か？」

「識別符号は確認できません」

「司令部に報告しろ」

「今呼び出していますが、応答ありません。モールス信号でやってみます」

「ああ」（どうなっているんだ）

コールウエル大佐の頭の中は混乱していた。

「モールスも駄目です。受信する信号は全く意味がわかりません」

「艦長！未確認飛行機が近づきます」

「観測用潜望鏡を上げろ」

艦長は潜望鏡で飛行機の飛来する方向を見た。双発のズングリした機体が見え、まっすぐこちらに向ってくるのが見えた。見たことがない飛行機だった。自衛隊の新型機とは思えないほど旧式に見えた。胴体部分から二個の落下する物体が見えた。コールウエル大佐は直感で爆雷と判断した。

「爆雷を投下した。急速潜航！衝撃に備えろ」

「急速潜航！」

潜望鏡が降ろされ、潜航を始めたところ、海中に落下した音がし、二度の爆発音が轟き、船体が激しくゆれ、電灯の一部が割れて吹き飛んだ。

「何なんだ！」

洋次は海岸線が回りこんでいるような地形で、内陸には少し木々が生い茂っているところが見え、人が住んでいるようには感じられなかった。背丈ぐらいの木があるところまでたどりついた。そこは海岸から300メートルぐらいのところだった。

「ここで衣服を乾かそう」

そう言って洋次は上着とズボンを脱いだ。浩平も近づいてきて、同じように脱いで、服を木に乾くように広げて干した。順子は最初恥ずかしいと言っていたが、洋次は僕たちのほかには誰もいないよと言ったので、仕方なく脱ごうとした。

「まず、ブラだけ乾かしてから。スカートも乾かしてと」

と、聞えるよな独り言を言いながら、ブラジャーとスカートを脱いで枝にぶら下げた。

「ねえ、あなた。私たちって漂流者？」

「うん、遭難したんだが、まあ漂流者とも言うかな。でも、米軍機は何故俺たちを撃ったりしたんだろう。誤射にしてはおかしいし、帰ったら政府に抗議してもらわなければ」

「そうよ、私たちをこんな目に合わせて。下手したら死んでいたのよ」

「でもその前にここがどこで、どう助けを呼ぶか見つけなくちゃ。人影もないし。服が乾いたころは、多分日暮れで行動はできないだろう。・・・何か食べるものを見つけないと。

おい、浩平火を起こしたいから、枯れ木を集めといてくれ」

「うん」

「お母さんも手伝うわ」

「あそこに椰子の実がなっているみたいだから、登ってとってくるよ。それと、海に行つて魚を獲ってみよう。釣竿も餌もないけど」

洋次は歩きながら小さい頃、秋になると庭にあった柿の木に登って柿をよくもいで食べていたのを思い出していた。久しぶりの木登りで、柿の木に比べて高いやしの木にうまく登れるか不安な心持で歩いていった。日本の近くで、こんな椰子の生える暖かい場所があるなんて知らなかったと思いながら、早歩きで椰子の木に近づいていた。

椰子の木の根元まで行って上を見上げると、思ったより高いのが実感だった。

(よし、でも登らねば)

と思い、太い幹に腕を巻きつけて登ろうとしたが、2メートルほど登ったところですべり落ちてしまった。もう一度やっても同じ結果だった。

(これは、なかなか大変だぞ)

少し考えた。昔、テレビで登るところを見ていたような記憶があった。それを思い出そうとしていた。そうだ(手にロープを持ち、ささえるようにして、足の土踏まずで幹を支えるように登っていた)ことが、記憶の断片としてあった。

ズボンのベルトを取りに戻り、再び挑戦した。やはり、最初は数メートル上にいっただけですべり落ちてしまった。次は、要領を会得したのか、ゆっくりではあるが、体が上にあがっていった。かなりの時間をかけて登ったような気がしたが、10分ほどしかたっていなかった。非常に疲れたが、気分を持ち直して、椰子の実に手を伸ばして、掴んで回すと下に落ちていった。六個の実を落とす。それ以外は実がまだ小さかったのである。下に降りるほうがむずかしかったが、降りるというより落ちるといったほうが表現的には適していた。下につくと、洋次はしばらくへたり込んだ。やっと起き上がった洋次は2個の椰子の実を手にとって、二人のもとに戻っていった。

「おーい、なんとか採れたぞ」

「枯れ木も集めたわ。これだけあればいいわね」

「ああ。僕は海へ行って魚採りに挑戦してみるよ。あと椰子の実が4つ転がっているからとってきておいて」

「はい」

「パパ、頑張るね」

浩平が笑顔で父を労い見送った。

「おう。まかしとけ」

と、言った洋次ではあったが、竿も餌もなく、どう魚を獲るのか思案に暮れながら海へと向っていた。

潜水艦シーライオン号は非常事態に陥っていた。

「被害状況を報告せよ」

サッチ少佐が各部署に損害状況を報告するよう促した。

「バッテリー一部使用不能！機関室浸水！」

「すぐ復旧せよ」

「艦長、どこの哨戒機でしょう？」

「わからん。だが、見たことのない飛行機だった」

レーダー担当のロバート少尉がわめいた。

「艦長！フリゲート艦らしいもの2隻。8時方向から近づきます。距離五千ヤード」
艦は転舵しているので、先ほどの4時方向から変わっている。

「浸水は止まったか？」

コールウエル艦長はサッチ少佐に聞いた。少佐は艦内電話で機関室に聞いた。

「間もなくです」

「急速潜航用意！深度300（フィート）。針路050」

「アイアイサー。メインタンク注水用意。急速潜航用意」

「機関室復旧完了です」

「急速潜航！」

ビィビィー

ブザーが鳴り、海水がメインタンクに取り込まれる音が響き、艦首を下に下げて降下を始めていた。

「ソナー音聞えます。距離千ヤード」

音を聞きながらロバート少尉はサッチ少佐に話をしていた。

「少佐。ソナー音がおかしいです。非常に古いものです」

「古いもの？とは？」

「たとえば、50年、60年前のものです」

「？」

このロバート少尉の意見をどうとればいいのか、少佐は判断に困った。

「潜航深度300。艦水平」

操舵手が告げる。

「爆雷投下しました」

「爆雷に備えよ」

静寂の短い時間が過ぎていく。

ドカーン！ドカーン！

2発の爆雷が炸裂し、艦が左右前後に揺れる。続いて2発が爆発した。少し遠いせいか被害は無かった。

「面舵！深度350」

爆雷は少し上で爆発しているようなので、艦長はさらに深度をとる命令を下した。

海面で爆雷を投下している駆逐艦は日本海軍の新鋭駆逐艦松型であり、速力29ノット、爆雷120発を搭載する、輸送船団護衛専門の駆逐艦であった。ソナーも爆雷も当時としては最新鋭のものだった。爆雷の爆発最高深度は150メートルに達していた。

「爆雷投下！」

爆発まで緊張の時間が過ぎる。

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

今度はかなり近く、艦体が震え、烈しく揺れ、電灯が明滅し、一部は吹き飛んだ。

「発射管室浸水！」

「修理班急ぎ前部へ」

この様子を潜望鏡で見ているもう一つの潜水艦があった。米潜水艦バーダーである。

「近くに仲間がいたか？」

「聞いていません」

「いくらジャップでも、あんな見当違いなところは攻撃しないだろう」

「一発見まいますか？」

「敵は夢中でこちらに気がついていない。やろう。敵駆逐艦を襲撃する。針路010。深度100。一番から四番用意」

「アイアイサー」

シーライオン号は爆雷の中必死に耐えていた。

「艦長！反撃しましょう」

（基地との連絡はとれず、国籍不明の艦から攻撃を受けている）

コールウエル大佐はしばし考えた後、決断した。

「魚雷発射用意！」

この戦闘の様子を眺めていた潜水艦が「バーダー」の、艦長のコロンボ少佐は4マイルほど離れた所から潜望鏡で眺めてたが、襲撃のため一旦潜航し、魚雷攻撃の準備をした。

しかし、しばらくすると、大きな爆発音が一回轟いた。

「魚雷発射準備完了」

爆雷攻撃は一旦休息の時を迎えていた。駆逐艦も次の爆雷攻撃の為に、探知をしているらしかつた。

「よし、今だ。1番発射！」

「発射！」

シュッ！ という音とともに、魚雷が発射された。魚雷に追尾ミサイルと同じ構造になっており、目標をはずれることはない。魚雷は45ノット（約82k/h）の高速で走る。

「命中まで40秒」

待つ時間は意外と長い。

「あと10秒、・・・5、4、3、2、1」

ド、ドーン！間を置いて、ドーン！という大きな誘爆音が海底まで響いた。

艦尾に命中した魚雷により、積載している爆雷が爆発したのである。

「バーダー」の艦長が潜望鏡を露出した頃には、艦首が僅かに海面に出ているだけであった。轟沈である。もう、一隻の駆逐艦は、警戒しながら、海面の生存者を探し出そうとしていた。

「襲撃は中止！」

「深度200。針路180。前進中速！」

シーライオン号を現場から退避させようと、コールウエル艦長は命じた。

「艦長、まだ1隻の残っていますが」

「今はまだ国籍不明の艦艇に対し、無理な攻撃は避けたい」

「艦長！3時方向に潜水艦です。距離5マイル」

「敵味方識別は？」

「味方の応答符号はありません。ソナーのよる艦型識別も不明です。推進器音のコンピューター解析では過去のものです」

「潜水艦もどこのなんだ。いったいここはどこだ？」

海岸に立った洋次は、さてどうやって、魚を獲ったものか、海を眺めながら考えた。釣り道具もなく、銚もない。網もない。素獲りしかないのか、捕獲は難しいと思った。洋次は、追い込み漁の要領で、魚を浅瀬に追い込み掴み獲るしかないと思い、浅瀬の窪み状になっているところを探し、少し手直しをした。太陽はかなり西に傾いていた。あまり時間はなかった。海に入って、潜って魚の要るところを探した。それを何回も繰り返した。な

かなかいなかった。魚を見つけて、追い込もうと試みても、魚にうまくかわされて、思うようにできなかった。陽が暮れ始め、もうこれで最後と思って、試みたところ、魚がうまく浅瀬に逃げ込んでくれた。それは、2匹の魚だった。少し大きいほうに狙いを定め、逃げられない様に工夫をして、掴み獲りをした。数回の後、確保した。もう疲れきっていたが、獲れた喜びは大きかった。獲物は30センチほどあった。

洋次は、獲物一匹を手に持ち、妻と子供の待ちわびる、火がついた場所に向った。順子と浩平はなんとか椰子の実からジュースを取り出すことに成功し、おいしそうに飲んでいった。

「あなた、飲む？」

「ああ」

洋次は、枝に魚を刺して、適当な枝を砂の上に組み立て、飯盒の要領で、串刺しにした魚を置いた。炎の先が魚の尾びれの先に触れていた。洋次は腰を落とし、椰子の実を手を受け取ると、よほど喉がかわいていたのか、ゴクゴクと飲んだが、飲みすぎるといけないと思ひ、飲みたいが飲むのを止めた。

「うーん、うまい。風呂上りのビールよりうまく感じるよ」

洋次はポケットから石を取り出した。

「どうしたのそれ？」

浩平が石をどうしてひろったのだろうか不思議に思い聞いた。

「学校の授業で聞いたことないか？古代人間はどうして採集をしたか？」

「あっ、石器」

「そうだ」

洋次はその石をぐると回して見た。片方が一部鋭利になっていた。

「ここでこうやって切る。包丁の代わりだけど、どこまで切れるか」

洋次は、その石器を手に取り切る恰好を浩平に見せた。

「すごいね。実験みたい」

「実験？そうだね。だけど、しばらくはこれが、生活に必要となる」

しばらくすると、魚の焼けるいい匂いが漂い始めた。

「椰子の実の果肉をこれでとってみるから、浩平全部中身を飲んで」

浩平は、ゴクゴクと飲んだ。残りは少なかったのか、すぐ終わった。

「はい、パパ」

椰子の実を受け取った浩平は、石器を右手に持つと椰子の実を割ろうと叩きつけた。石の尖りが、椰子の実に突き刺さるのを繰り返して、少しずつ割れていくのが、炎の明るさのなかでも見えていた。

「よし、割れたぞ」

洋次は中の白い果肉のようなものを石器で切り取るように削りとった。それを、口に運び食べてみた。味見をするように慎重に触感と味を確かめた。

「どう？」

順子がゆっくりとした口調で聞いた。

「悪くはないね。腹のたしにはなるだろう」

「僕、食べてみたいよ」

浩平は、洋次が切り取った果肉を手に取り、口に入れて食べてみた。

「なんか渋いよ。まずい」

「まずくても、他に食べるものはないんだ。食べるんだ」

「はい」

「もう、焼けたかな」

洋次は魚がささっている枝をとり、焼け具合を確かめるため、少し口をつけた。

「アツツ、フーウ。ウーン、うまい。よく焼けてるぞ」

「浩平、食べるか」

「うん」

浩平は、魚の刺さっている枝を受け取ると、フーフーフーしながら魚を食べた。

「ママも食べて。おいしいよ」

順子も手にすると、一口食べた。

「ウーン。ほんと。オイシイ」

一匹の魚はあっという間になくなってしまった。三人の空腹を満たすには当然足りなかった。暗くなった今としてはもう、寝るしかなかった。

「明日がある。さあ寝よう」

洋次は、枝をしっかりと火にくべてから、横になった。三人のどんでもない一日目がようやく終わろうとしていた。それは、明日からの未知の世界への始まりだった。

三人はまだ寝ていた。周りは十分明るくなっていた。というより、太陽が三人を照りつ

けていた。じわじわとした暑さで洋次は目を覚ました。眩しい太陽を見上げようとしたが眼をしっかりとあげることができず、一度下をみてから、顔を水平に戻した。妻の順子と愛息浩平が寝ていた。浩平が寝返りとうつと薄目を開けた。

「パパ、起きたの」

「ああ」

「ねえ、ママ起きてよ」

浩平がまだ寝ているママの方を向いて少し大きな声で言った。

「浩平、学校は？ママ寝坊したみたいね」

「ママ、寝ぼけてるよ」

浩平は、洋次の方を向いて、ケラケラ笑った。

「エッ？何？」

順子はやっと、昨日からの現実の世界に戻っていた。

「ああ、そうだったんだわ。遭難したんだわね。もう、お花いっぱい咲いている公園を優雅に散歩していた夢を見ていたの」

「ああ、いいよ。夢ぐらい楽しいのを見なきゃ」

洋次は、妻の楽しかったであろう夢の世界を想像して微笑んでいた。

遠くの方の木陰から三人の様子を伺っている人の姿があった。その陰がうごめいたのを浩平が気づいた。

「パパ！あそこに誰がいるよ。今動いたよ」

「えっ！」

洋次は浩平が指差す方向を見た。順子も凝視していた。向こうもこちらが気づいた気配を察したのか、小走りに逃げていった。

「子供か？」

身長が小さかったので、子供かもしれないと思った。

「追いかけてみよう」

洋次は立ち上がり、行方を追った。走った。

「あなたー」

「ここで待ってろ」

洋次は一旦振り返って順子に待つように言うと、一目散に走っていった。みるみるその姿は小さくなっていった。

洋次は、見失った姿を追った。かなり走った。そこは、灌木があり、見晴らしは少しさ
えぎられていた。

(見失ったか?)

息を切らせながら、落胆して順子と浩平の方を振り向いた。手を振っているのが見えた。
と、後から飛びつかれ倒され、押さえつけられた。

「誰だッ！」

腕を振り払おうと必死にもがいたが、三人に押さえつけられ、もうどうしようもなかった。

順子は、小さな洋次の姿が突然消えたので、ただならぬ出来事の思いが脳裏をめぐり、
浩平の体を抱きしめていた。

(どうしたの?)

戦闘が終了してから、三時間が過ぎていた。水上の駆逐艦は視界から消えていたが、ま
だシーライオン号は潜航のままだった。まだ、国籍不明の潜水艦が追跡していたからだっ
た。

「艦長。どうしますか？」

サッチ少佐が聞いた。

「君はどう思う？」

コールウエル艦長はミネラルウォーターを飲みながら逆に聞いた。

「艦長。今までの状況を整理してみると、我々の乗っているシーライオン号は、時空の狭
間に偶然にもはいつてしまい、第二次大戦末期の同じ場所にワープした。そこには、当然
日本海軍の艦艇や輸送船が存在していた。日本海軍の駆逐艦は、敵国アメリカの潜水艦を
発見し、攻撃してきた。我々は、60年前にワープしたとは知らないまま、戦闘状態に突
入しました。偶然、アメリカの潜水艦も遊弋していた。お互い、その国籍がわからないま
ま、潜航して相手の動きを監視している。戦闘中のアメリカ潜水艦は、われわれのことを
母国の潜水艦だとは思えない。しかし、敵ではないということはわかる。とういことです
何故、SFみたいにワープしたのか、まったくわかりません。確かなのは、60年まえに
いるということです」

「君の推理が正しいとしよう。この先どうする？浮上するかね」

「艦長！やってみる価値はあると思いますが」

少佐は、ガムを口に入れると、ゆっくりと噛み始めた。しばらく、静寂の時間がだった。

艦長は

「60年前の同胞は、この潜水艦を見たら、さぞやびっくりするだろうな」

「はい、艦長。秘密兵器でも見るようなことだと思います」

「浮上する！」

「アイアイ・サー！浮上。メインタンクブロー」

艦内のバラスト用の海水を外へ排出している音が響いていた。

シーライオン号は徐々に浮上を始めた。

「即戦闘準備のまま待機せよ」

「まもなく浮上します」

「星条旗を用意しろ！大きいやつだ」

副長のサッチ少佐が命じた。

「見張員出動準備！」

「浮上！」

「下部ハッチ準備よし」

気圧の変化でシューと空気が流れる音が聞えた。

「上部ハッチ準備よし」

「見張員あがれ！」

見張員二人が、ラッタルをあがっていった。一人が星条旗を持ち、一人はマシンガンを持っていた。続いて、副長と艦長が上がっていった。

バーダーの艦長コロンボ少佐は、この浮上しつつある潜水艦を潜望鏡でじっくり見ていた。そして、艦橋に掲げられつつある星条旗を見た。

「見たこともない潜水艦だ。しかもアメリカ海軍だ」

コロンボ少佐の興奮した声が、司令塔内に響いた。

洋次は暴れるのは止めた。それに、ろくなものを食べていないので、力も出なかった。どうとでもなれと観念して、おとなしくした。それが、わかったのか三人の男たちは、押さえつけていた手をゆっくりと離した。

「どこの誰だ？」

「・・・」

洋次は日本語で聞かれたので、少しビックリした。ここは、日本のどこかだという安心感があったが、椰子の実があるということと自分の持つ記憶との混乱が、納得のいかないものだった。

「僕は、佐々木洋次と言います。セスナ機が海に落ちて、この島に流れついたのです」

「セスナ機？」

「??」

三人は聞いたことがない単語を聞いて戸惑った。

「セスナ機って何だね」

洋次も、この三人はセスナ機を知らないということに戸惑った。

「セスナ機は空を飛ぶ飛行機の名前で、プロペラで飛ぶものですよ。5人乗りとか」

手を使って飛ぶまねをして見せた。

「聞いたことがある。50年程前までは、ガソリンを使いプロペラを回して飛んでいたのがあると叔父から聞いたことがある。あと、ジェットエンジンとかで、何百人かを乗せて空を飛んでいたとか」

「ほうー、そんなのがあったのか」

「だが、石油が枯渇して全部なくなると聞いた」

「それで、佐々木洋次さんは、そのセスナ機とやらはどうした？」

「海に沈んでしまったさ」

「そうか」

洋次の頭の中は整理できないまま、混乱状態だった。

「ちょっと聞いていいですか？」

「何だ？」

「今は何年ですか？」

「何年で？」

「2005年とか、2020年とか」

「ああ、今年は惑星暦45年だよ」

「惑星暦？」

「惑星暦を知らないか」

「その前は、西暦とか使っていたらしいが、天変地異があり、大きく変わってしまったらしい。我々は、惑星暦生まれだから、詳しいことはわからない。聞きたければ、村に二人だ

け生き証人がいるから聞くがよい」

「連れてってくれるか？」

「ああ案内するよ」

「ちょっと待ってくれ」

洋次は、妻と子供のいる方を見た。

「他に誰かいるのか？」

「ああ、妻と息子があそこに」

「一緒にいけばいい。食糧もあるから分けてあげるよ」

「ありがとう」

洋次は手招きで二人にこちらに来るように示した。洋次は、危害をくわえないだろうと判断したからだった。二人は恐る恐る歩いて近づいてきた。

コールウェル艦長とサッチ副長は艦橋に上がると、双眼鏡を手にして相手の艦橋をのぞいた。サッチ少佐は双眼鏡から目を離すと、見張員に言った。

「発火信号を送れ」

「はい」

見張員はライトを手にすると、相対する潜水艦の方に向けた。

「コチラハシーライオンゴウ、アメリカカイグントクシュニンムチュウ。ムセンコショウニツキコラレタシ」

しばらくすると、了解の合図が届き、

「サギョウインヲハケンスル」

との信号を受け取った。

「艦長、さぞや艦内を見たら驚くでしょうね」

「ああ、未来を見るんだからな」

コロンボ少佐はパーダーの艦橋からこのやりとりを眺めていた。

(このアメリカ潜水艦は秘密裏に造られた特殊な艦だろう。一度見てみよう)

「艦長。ゴムボートの用意ができました」

「ご苦労」

ゴムボートには、少佐の他、ロイド中尉と水兵2名がのりこんだ。ロイド中尉は無線技師

でもあったし、レーダー装置にも強かった。

波は穏やかであり、数分で順調にシーライオン号につき、甲板にあがった。水兵は甲板に残り、艦長と中尉はハッチから梯子をおりて、艦内を通りぬけて、司令塔へと足を運んだ。その内装や設備からして自分の乗っている潜水艦とは比べ物にならないほど、すばらしいことを感じていた。

「艦長！同じアメリカ海軍のものとは思えません」

「そうだな」

さらに、司令塔内に足を踏み入れた途端、息をのんだ。

「すごい」

ロイド中尉は、その電子設備が今までみたこともない程すごいものであるかを感じていた。そして、嘘に違いないと思った。

「ようこそ、シーライオン号へ」

二人は敬礼で迎えられた。

「あなた、大丈夫？」

順子は、おそるおそる近づきながら聞いた。しっかりと浩平の手は握っていた。

「ああ、大丈夫さ。さあ、おいで、浩平」

浩平は、ママと握っている手を離して、パパ洋次の所に小走りで擦り寄った。そして、しっかりと手を握った。

「お前の子か？」

少し小太りで、まだ若い感じの男が聞いた。

「ああ、俺の子で、浩平、10歳。そして、あちらが妻の順子」

「よろしく・ね」

順子は小さな声で、ゆっくりと話、会釈がわりに頭を少し下へさげた。

「どの位歩くだい？」

「えっ？」

「あなた方が住んでいる家まで」

「ああ、すぐそこだ。あそこに高い木が見えるだろう。あの向こうだ」

「なるほど」

6人は森の中へと入っていった。

ジャングルとまではいかないまでも、草木がけっこう茂っており、歩く足場はあまりいいものとはいえなかった。というのも、皆靴は脱げてしまっていていつの間になく、裸足だったからだ。彼らも何故か裸足だった。日本人なら裸足で生活する人はいないはずだと思ったが、やはり、全然違う時代にきたのか。全く理解に苦しみながら歩いていた。

「足が痛いよー、パパ」

「私も痛い」

「俺も痛いよ。でも、我慢するしかないさ」

「もうすぐ、つく」

先頭を歩く一人が少し振り返りながら言った。100メートル位行くと、視界が大きく開け、草原とそれにマッチするように高床式に作られた家が数軒建っていた。

その光景をみた洋次は、ここが日本の将来の姿？を見て、茫然とした面持ちになった。妻の順子も、どこか東南アジアに来たような錯覚を覚えていた。

ロイド中尉は、司令搭内にある電子機器の多さとすごさを理解しようとしていた。ただどれも目にしたことのないようなものばかりだった。

「艦長、この装備は見たことも聞いたこともありません」

コロombo少佐は、中尉の言っていることを、自分も直接目にしており、理解していた。

「シーライオン号艦長のコールウエルです。彼は副長のサッチ少佐」

「どうも、はじめまして」

「バーダー号艦長のコロomboです」

三人は握手をしながら、挨拶を交わした。

「彼は、わが艦の技術将校です」

コロombo少佐はロイド中尉を紹介した。

「ロイドです。ロイド・ブラウン。ハーバード大で電子工学を専攻していました」

「なら、ロイド中尉。この中の電子機器には興味深々というところかな」

「はい。すべて、始めて見るものばかりです。ですが、素晴らしいものではないかというのが実感です。今の技術では製造不可能なものでしょう」

「よい眼のつけどころをしている。確かに、製造されていないものだ。だが、しかし」

サッチ少佐は二人を姿を大きな眼を見開いて追った。そして、続けて言った。

「科学技術は日々変化していく。特に60年の歳月はすごいものだと感じるだろう」

「60年？どういう意味でしょうか」

コロンボ少佐は尋ねた。

「わたしが説明しましょう」

コールウエル中佐が口を開いた。

「この潜水艦は見たこともない型の潜水艦。それも同じアメリカ海軍のものです。そしてこの潜水艦は58年後に建造されたもので、われわれは、60年後の未来から現在へと忽然と姿を現したのです」

「どういうことだ？」

コロンボ少佐は、不思議そうな顔付になり、あいつぐ戦闘で現実離れしているのではないかと思った。

「理解できないことだと思います。われわれも理解できていません。何が起ったのか全くわかりません」

隣にいたサッチ少佐が口をはさみ、さらに続けた。

「思うに、我々は日本近海で軍事演習中でした。その最中突然嵐となり、嵐がおさまったあとは、60年前の戦争真っ只中にいることに気が付きました。時空を越えてきてしまったのです」

「60年も未来から来たというのですか？信じられません」

「でも、現実です」

「アメリカと日本はその60年後どうなっているのですか？」

「日本は1945年8月15日に無条件降伏し、その後驚異的な経済復興をなしとげました。日本は戦争を放棄したため、軍隊を持ちません。自衛権だけの装備を持つだけです。で、日米安全保障により、米軍が日本に駐留しています」

「アメリカと日本は互いに手を取り友好関係にあるというんですね」

「その通りです」

「この戦争はもうじき終ると」

「はい」

「それを聞き、希望がわきました。こんな長い戦争はもうこりごりですから」

「艦長！三時方向に敵哨戒機を探知しました。距離60マイル」

「よし、わかった。警戒態勢に入れ」

「コールウエル中佐、艦に戻ります」

コロombo少佐は、敬礼をした。中佐も答礼を返した。

「武運を祈ります」

「ありがとうございます。中佐はどうしますか？」

「パールハーバーに行ってみよ」

「では、シーライオン号の航海に幸あるように」

コロombo少佐らは、再びゴムボートに乗り、バーダー号へと戻っていった。

艦橋でその姿を見ていたサッチ少佐の脳裏には、この現実を本当に彼らは信じて見ていたのだろうか、考えていた。

向こうから一人の白いひげを生やした老人が数人の若者を連れて歩いてきた。

「あの老人が、この村の長だ」

洋次は、その歩いてくる老人をじっと見た。かなりの高齢と見た。だが、その顔には妙な親近感を覚えた。洋次は、順子と浩平を見るために振り返ると、大丈夫だからと言いつけさせるように、見つめ頷いて見せた。

「オサ、海岸で見つけた。漂流したらしい」

連れてきた一人が、長に話した。

この老人は、皆からオサと呼ばれていた。洋次は、名前がないのか、名前によさがつくのか見当はつかなかった。

「何もないが、ゆっくり休むがよい」

「ありがとうございます。僕は、佐々木洋次と言います。ここにいるのは、妻の順子と息子の浩平です」

順子と浩平は軽くお辞儀をして挨拶をした。オサはウンウンと頷いた。

「それで、ここには、電話とか、無線とかないのですか」

「ここには何もない。それより、腹が減ってないか」

「まあ、ええ。ろくに食べてないので」

「話はそれからだ」

オサは後をふり向き、従っている若者の一人に言った。

「次郎、お前の家で何か食わしてやれ」

「はい、オサ」

「こちらにどうぞ」

洋次は順子の手を握り、次郎の後に従った。家の中に入ると、やはりどう見ても、テレビでよく見る南国の家であった。しばらくすると、鍋がいろりにかけられ、粥が作られていた。おいしそうな匂いが家の中に漂い始めた。浩平のお腹がキュウーと鳴った。

「うまそうな匂い！」

浩平は、待ち遠しそうににっこり笑って言った。いつも、いろいろな食材で作られた食事に比べれば、ただの粥であったが、これほど目の前にあがる湯気がおいしそうに思えたことはなかった。

「ほんと、おいしそうね。何か久しぶりにあったかいものを食べれるって感じかしら」

順子も、浩平の肩を軽く抱きしめながら言った。粥がお椀に注がれた。

「はい、どうぞ」

一つ目の椀が洋次に渡された。洋次は、浩平の手に渡した。

「はい、浩平。食べなさい」

「うん」

浩平は、その椀を手を受け取ると、箸をもらい食べ始めた。

「パパ、おいしい」

浩平はにっこり笑って、洋次に言った。

「おいしいか、それはよかったね」

洋次も椀を受け取り、粥をすすり始めた。

「ウーン、これはうまい」

「ほんと」

順子もこんなおいしいものを食べたことは、久しくなかったことだった。

三人は腹いっぱい食べた。

しばらくすると、オサの所に来るようにと、使いの若者がやってきた。三人はご馳走になった御礼を言って、家を出て、若者に従い、オサの家に向かった。

「オサ、連れてきました」

「中へ入れ」

三人はオサの家に入った。オサだけに一回り大きな家だった。

バーダー号は、潜航をはじめ、船体が没し、艦橋が波に洗われながら、海の中へと消え

ていった。シーライオン号のレーダーには、近づきつつある飛行機を捕えていた。

「急速潜航！」

「アイアイサー」

「深度300！（フィート）速力10ノット、針路090」

ブザーが鳴り、船殻に海水が注水され、ゴボゴボという音とともに、船体が沈下をはじめ30秒で船体は、海中に没した。

「深度300。水平に戻します」

「バーダー号は、どこだ」

「8時方向、3マイル先を針路240で航行中」

「敵機は？」

「バーダー号の方を探索しているようです」

バーダー号は、長い航海と戦闘の為に、船体の各所に水漏れが目立ち、そう深くもぐれなかった。200フィート以上は、早急に修理をしないと水漏れするのだ。しかし、先程の戦闘からまだそう時間がたっておらず、応急修理も間に合っていなかった。あと、長時間潜るのに必要な、蓄電池の量も少なかった。蓄電池の量を満杯にするには、浮上して半日は必要だった。今、潜り続けるには、速力を落とすかして、放電量を少なくするしかなかった。

上空を哨戒している日本の飛行機は、「東海」という対潜哨戒専門の飛行機で、世界でも初めての磁気探知装置を備えた飛行機だった。この飛行機は、日本海軍が米潜水艦の掃蕩に手を焼いていたため、急速開発された代物だった。航空機レーダーも遅れながら日本軍機も装備を少数ではあるが、搭載されていた。しかし、レーダーも潜航している潜水艦を探知することは不可能だった。米海軍もドイツUボートとの戦いでは、レーダーだけでは不足で、結局水中ソナーを航空機より投下して探索するシステムを取り入れた。しかし日本海軍は、金属物体が水中や水上にあるとき、地磁気が乱れて、その物体周辺の磁気が強まることを応用することを考え、その磁気を探知して敵の、特に潜水艦の所在を突きとめることを考えたのである。

「機長、磁気計の針が振れています」

「よし、この辺りを探ってみよう。高度を100まで下げるぞ」

洋次ら三人はオサの家に入った。素朴な家だった。中に入ると、家財道具は、テーブル

と椅子が置いてあるだけであり、テレビやラジオの類はなにもなく、それどころか電気器具らしいものがなかった。テーブルにはランプが置いてあるだけだった。

「よく来てくれた」

と、オサは洋次に近づき握手を交わした。その時、浩平はそのオサの腰に何かぶら下がっているのを見た。

「僕が持っているのと同じお守りだ」

「エッ？」

順子は、浩平がそのお守りに手をやろうとしているのを見た。

「何やっているの。だめよ」

浩平はその手を引いた。順子は、その時オサの右足のくるぶしのところに小豆位のほくろがあることに気が付いた。

(浩平と同じところにほくろがあるわ)

「そこらにこしかけるがよい」

と、オサが言うので、三人は厚手の布が布いてある所に座った。自分たちが使っているような刺繍の入った綺麗な絨毯ではなかった。少しごわついた感じのものだった。

「オサの右足のくるぶしに浩平とおなじようなほくろがあるのよ」

順子は、洋次の耳元でささやいた。洋次はその部分を目でおった。位置的にはっきり見えないが、少し黒い部分が見えた。お守りも、腰に紐でぶら下げてあり、浩平と同じ神社のもののような感じだった。というのも、色あせて汚れており、よく見ないと一緒の神社のものか断定できなかった。しかし、疑問は湧いた。なら、その神社は存在するからだ。やはり、日本に違いないと思えるからだった。

洋次は思い切って聞いてみることにした。

「オサ、その腰につけているお守りはどうしたのですか。大分古いようだけど」

「ああ、これか」

オサはそのお守りを手にとってみせた。

「わしの大切な守り神だ。8歳の時だったか、何がおきたのか全く記憶にはないが、海に漂っているところを助けられた。両親は見つからなかったと聞いた。祖父母に育てられたが、12歳の時、事故で祖父母も亡くなり、その後、施設に入れられ、あちこちを転々としながら暮らしていた。30歳の時だった。大きな地震があった。それはひどい地震だった。何もかもが破壊された。いつしか平和もなくなり争乱が各地でおこるようになり、や

が戦争となった。もう、なにも残らないのではないか。地球が滅亡するのではないかと思った。戦争が終わりを告げた時、というか、もう戦争に嫌気がさした時、残る人類は半分以下に減っていた。残った者は、復興にとりかかった。この守り神は、わしをずっと見守っている」

洋次と順子は、これが事実なら、この老人が私たちの子だとしたら、そして、私たちは死んでしまったということを知り、呆然とした気持になった。

「それで、その後どうなったんでしょうか」

洋次は、将来のことを聞きたいと思った。

「科学は非常な発達を遂げ、作物栽培も天候に左右されることなく、収穫できるようになった。わしが、65歳の時について夢のマシンが誕生した。それが、タイムマシンとUFOだった。いつでも、時空をこえられる。そして、宇宙空間を自由に飛びまわることができるのだ。しかし、半年ほど前に、誰かが、UFOでタイムマシンを使い、過去にいつてしまったのだ。それが、その時に大国アメリカの手に落ちてしまったのだ。アメリカはUFOを研究し構造を調べている。これは大変なことだ」

「それだ、ぼくは円盤らしき物体を見ました。その後、見てしまったために、落とされたのだ」

「見たのか？飛んでいるのを」

「はい」

「もう時間の問題だ。早く破壊しなければ、地球は滅亡してしまうぞ」

「どうして？UFOは夢の乗り物でしょう」

順子が持つUFOのイメージは見たことはないが、自由に飛びまわれる空飛ぶ円盤だから、未来の乗り物で、宇宙へ自由に行くことができるものだと思っていた。

「アメリカが軍事としてUFOを持てば、もし、悪事に使えばもっと破滅の道を歩むしかない。UFOを破壊しなければならない」

洋次と順子はしばらく顔を見合わせて沈黙した。

「機長、識別弾を投下します」

「用意！テッ！」

放たれた識別弾が海上ではじけ、赤い着色料が海面を染めた。旋回をして、爆雷の投下コースに入っていく。

「ヨーソロー」

そのままの機体保持を続けて飛べという、海軍用語である。宜しく候が詰まったものといわれているが、詳しくははっきりしない。

「テッ！」

爆弾投下の柄が力強く引っ張られた。

2発の爆雷が間隔を置いて海面に落ちていき、水飛沫をあげ、しばらくすると爆発して水柱をあげた。爆雷の場合は、時限信管で、海面に落ちてから何秒後か、水中に落下していく途中で爆発し、潜水艦に致命傷を負わす仕組みである。爆雷はあと2発しかない。もう一度の攻撃で終わりである。再度投下の寸前に、海面に油が漂いはじめているのに気が付いた。潜水艦に損傷を与えたかもしれないと思った。もう一度、爆雷を投下した。

「艦長、バッテリーがもう駄目です」

「機関室浸水中！」

「魚雷発射管室浸水」

「艦長！このままでは沈んでしまいます。浮上しましょう」

「うむ、そうしよう。浮上！」

「アイアイサー、浮上します」

ゆっくりと浮上を始めた。浸水により艦が重くなり、浮上する速度が遅い。

「深度120、100、80、60、40（フィート）、脱出用ハッチ準備！」

もう少しで海面という時に、すぐ近くで爆雷が爆発し、船体が大きく揺れた。司令搭内にも海水がどっと流れこんできた。司令搭は海面上に出ていたが、浸水がひどく沈下を始めていた。

「総員退去！」

艦内では、脱出を試みようとしたが、流れ込む海水に邪魔をされ、脱出に成功したのは僅か数人であった。

東海の機長杉本少尉は爆雷を投下したあと、状況を確認するため旋回を繰り返した。

「機長！気泡とともに油が浮き上がってます」

潜水艦より流出したであろう重油が回り一面に漂いはじめ、段々と広がっているのが見え、残骸の一部らしい浮遊物も波間に見えた。

「やりました。撃沈確実です！」

「打電しろ！ワレ敵潜水艦ヲ攻撃ス。効果大。撃沈確實」

潜水艦パーダー号より何とか三人が脱出した。脱出口からかろうじて海水にもまれながら海上に踊り出た。

「ジミー、大丈夫か」

「フゥー、大丈夫だ。ケリー」

二人の青年は、ジョージ・コナー少尉とケリー・バレンタイン曹長だった。二人は近くに浮いていた小さなゴムボートに手をかけて身をゆだねた。

「助かったんだ」

「ああ」

二人は海水をかなり飲んでおり、ぐったりして会話はそれだけだった。ジミーは周りの様子をうかがった。重油で海面はどす黒くなっていた。そして、潜水艦の残骸の一部が漂っていた。よく見ると10メートル先の波間に一人の仲間がぐったりとした様子で漂っているのを見つけた。

「ケリー、あそこだ」

ジミーは指をさして、その場所をケリーに示した。

「誰だろう？助けに行こう」

「アァ」

二人は協力してゴムボートに手をかけ、泳いでその方向に進み始めた。近くなるにつれ、顔だけをかろうじて出していたが、朦朧としているようだった。声をかけても返事はなかった。その波間に漂う少し見える顔つきから、フランク・ローランドー水のようにだった。

「フランク！」

二人はフランクの所にたどりつき、フランクの手をゴムボートにしがみつかせた。ほとんど意識はなかった。手の力もなく、二人で支えているのがやっとだった。ケリーがボートにあがり、ジミーが下から押し上げ、苦勞してフランクの身体をボートに引き揚げた。フランクは息はしていた。が、何の処置もできそうになかった。道具も薬もなかった。二人ともへとへとだった。狭いボートの中に横になって、しばしの休息をとった。

「艦長！パーダー号が撃沈されました」

副長のサッチ少佐がコールウエル艦長に告げた。

「生存者はいそうか？」

「無理かもしれませんが。潜航した直後のようですから」

「とにかく、一度もどって確認したほうがいいだろう」

「わかりました。針路反転！浮上用意！」

「アイアイサー」

シーライオン号は反転してバーダー号が沈没した地点へと向かった。日本海軍機は撃沈したと思い、帰途についており、上空には何もいなかった。浮上してサッチ少佐と見張員が付近を探索した。重油と残骸の破片が多数浮いていた。誰も生きていないように思えた。しかし、一人の見張員が数百メートル先に何かを見つけた。ゴムボートが波間に漂っていた。上に人が乗っているように見えるが、その物体は動いていなかった。

「副長！あそこにゴムボートが見えます。人も乗っているようです」

「どこだ」

サッチ少佐は双眼鏡をあてて、その方向をじっくり見た。

「二人ほどいるようだが」

少佐は司令塔に連絡して、艦首をそちらに向けさせた。

「艦長！生存者がいるかもしれません。そちらへ向かいます」

2ノットほどのゆっくりとした速度でゴムボートへと向かった。

「メガホンをとれ」

少佐はメガホンをとると叫んだ。

「おーい！生きていたら手を振れ！」

ジミーとケリーは朦朧としていた。少し落ちつきをとりもどした時、何か船が近づいてくるのを感じた。日本の船が撃沈した潜水艦を探索にやってきて、自分たちを見つけたのかもしれないと思った。捕虜になるんだと思ったが。命だけは助かるなとも思って、まだ目を開けずにいた。だが、近づいてきた船から聞こえてきたのは、予想もしなかった聞きなれた母国語だった。二人とも目を開けて声をする方を見た。それは見たこともない巨大な潜水艦だった。艦橋にある星条旗のマークが目に入った。

「助かった」

ジミーは小さな声で言いながら、手を高く振った。ケリーも続いて手を振っていた。見たこともない潜水艦だったが、友軍に助けられることは、幸運だった。

「重傷者がいるんだ！」

ジミーは救助のロープをつかみながら叫んだ。艦橋にいるサッチ少佐は二人の足元にぐったりとしているもう一人を確認していた。

「医療班待機」

少佐は司令搭内へ医療チームの要請を行った。

「セーフティボードを使うんだ」

サーフィンボードのようなものがボートに降ろされた。

「身体を固定しろ！」

ジミーとケリーはフランクの身体をボードに乗せると、ボードについた器具でフランクの身体を固定した。

「OKだ」

ジミーが動かしてよいという合図を送った。

フランクを乗せたボードはスルスルと潜水艦の甲板上に上がった。艦橋に上げるのは不可能なため、甲板上のハッチを開けて、そこからゆっくりとそのボードのまま艦内に下ろしていった。その間に、ジミーとケリーの二人はゴムボートから甲板に上がっていた。

「助かったよ」

「ようこそ合衆国潜水艦に」

助けた水兵の中の先任下士官が二人を歓迎する意味で言った。当然、彼はこの二人が60年前の軍人であると知っていた。

ジミーとケリーがまず改めて驚いたことは、制服が違うことだった。

(この潜水艦は見たこともないし、特殊任務で制服も特別なものに違いない)

と思っていた。

「艦内でどうぞ。軍医に一応見てもらいましょう」

二人はハッチから艦内に入った。ラッタルから中に下りると、隅でフランクの様態を数人が取り囲んで見ていた。口に何かチューブ状のものをあてており、身体を毛布で包み直しながら、身体をさすっていた。

「低温症と呼吸停止だ！心音はまだある。人口呼吸の方がいいだろう」

チューブ状のものを口からとると、人口呼吸を始めた。数回続けた。しかし、そのうち軍医が心臓の上を叩き始めた。でも、その動きも止まった。軍医は副長の方を見、続いて二人を見て、首を振った。

ジミーとケリーの目から止めどもなく涙が溢れ出ていた。二人はフランクの側により、最後の別れを告げた。無言の別れだった。沈黙のひとときが流れた。

「これに着替えてください」

水兵が二人の新品の下着と軍服を持ってきていた。二人は濡れた服を脱ぎ、新しいものに着替えた。軍医が二人に近づき、健康状態を聞き、目を見た。

「ジョージ・コナー少尉とケリー・バレンタイン曹長です」

「入院は必要ないだろう。しばらく休めばOKだ」

「ターナー少尉、二人を士官室へ案内しろ」

「イエッサー、副長」

「しばらくゆっくり休むといい。あたたかいスープでも持っていかせよう。コナー少尉、バレンタイン曹長」

「ありがとうございます」

二人は少佐に敬礼をして、ターナー少尉の後について士官室に向かった。だが、まだ二人はこの潜水艦が未来からきたものだとは知らなかった。

「それで、僕らはどうすればいい？」

洋次は険しそうな眼差しを現して言った。順子は洋次の手を握りしめていた。

「少し行ったところに、地下への道がある。そこへわしとここにいるタケといっしょにいきましょう」

少し間隔を置いて座っている若者を指さしてオサは言った。

「出かける前に腹ごしらえだ。少し温まるとよい」

オサが手を叩くと、鉄鍋を持った二人の女性が中に入って来た。それを床に置いた。湯気が立ち昇っており、雑炊のような風に見えた。

「何もたいしたものはないが、これでも食べてくれ」

木の椀に雑炊が八文目ほど注がれて渡された。竹製の箸が配られた。三人は椀と箸を受け取ると、フーフーフーしながら椀の箸に口をつけて、すすりはじめた。

「熱い！アツイヨ」

浩平はお腹がペコペコであり、早く食べようと思って、冷め切らないうちに口にいったが、その熱さに耐えられなかった。まだ浩平には熱いものをかけこむのは無理だった。

「ちゃんとさましてから食べないと、やけどしちゃうわよ」

順子が心配そうに浩平に言葉をかけた。

「うん」

浩平は、もう一度冷ますようにしてから、口に運んでいた。

「うーんおいしかった。こんなうまいものを食べるのは久しぶりだ」

洋次は、満足そうな表情をうかべ、椀を床に置いた。

「おかわりはいかが？」

「いやもう充分です」

三人が食べ終わると、オサが立ち上がり支度を始めていた。

「では、でかけるとしよう。歩きながら話せばよい」

オサは支度が整ったのか、家の外へと出て行った。タケも続いて立ち上がって外に出て行った。

「はい、では参りましょう」

洋次ら三人は立ち上がって、家の外へ出た。当然彼らにはなにも荷物はなかったのも、身軽であった。5人のメンバーは歩き始めた。オサが歩きながら話し始めた。

「地上にはご覧のように何も無い。それは、核による放射能汚染と地球環境の変化による空気の汚染にある。われわれも、地上にいる時間は三時間と決められている。それは、太陽の赤外線と紫外線に触れるためにある。それ以上地上にいるのは非常に危険だ。われわれの生活の大半は地下の汚染物質を除去できるシェルターの中にある」

「だから、地上には人影が少ないんだ」

洋次は納得したように言った。

「この辺りの気温は、50年前より、平均気温で3.5度高い。亜熱帯性の気候になっている。冬でも最低気温は10度を下回ったことは、最近5年間ではまったくない。夏は40度を越える日が、10日以上もある。南極の氷河はほとんどが消え、海面は急上昇し小さな島は沈み、大陸の沿岸部も多くが水没した。かつて日本列島と呼ばれた地域も、多くの平野が水没した。さらに、マグニチュード8.7の大地震が発生し、大津波との被害で沿岸の大都市は壊滅状態となった。日本だけでなく、全世界で大地震が発生し、それが不安を呼び、食糧不足とも重なり、暴動は大きく広がり、国家間戦争まで発展し、挙句の果てに、核兵器を使用してしまう国まであらわれた。もう、疲弊し争う気力もなくなってしまった。もう、地球は死んだも同然の姿になってしまった。だが、私は、同志を集め復興の道を模索することとなった。我々が食べる食糧は、地上は汚染され生産することは不可

能だった。それを食べれば、白血病で死んでしまうからだ。そえでも、空腹には耐えれぬからと食べ続け、多くの人が死んでいった。でも、自然の適応力はものすごく、ここ数年放射能を除去する作用があるものが確認された。今その遺伝子構造を解明しているところだ」

「じゃ、食糧生産も地下で？」

「ああ、今は地下施設でたくさんの食糧を生産している。米、麦などの主食品と生鮮野菜だ。家畜はしていない。家畜を育てるほどの食糧は生産できないからだ。ただ、将来を考え、遺伝子保存のためにだけ、最低限の動物はいるがね」

「UFOの開発はいつ？宇宙に行けるのかい？」

「UFOが出来たのは、やっとな年前のことだ。開発に5年もの歳月を費やした。その開発の元は時空移動が出来ることだった。この空間には目に見えない切れ目があることがわかったのだ。それはいままではどこにあるのか、いつ現れるのか皆目見当がつかなかったのだ。だが、それを現出できる時を発見したのだ。それでUFOが完成したのだ」

オサは立ち止まった。そして指を指し示した。

「ここが入口だ」

扉が開けられた。地下への入口だった。扉は平凡な鉄扉だった。下へまっすぐのびる階段が薄明かりの中に見えた。30段ばかりの急な階段を降りると、横に延びる通路があった。15メートル程行くと、さらに扉があった。扉の横のセキュリティボックスのような箱にオサが右手をかざすと、ライトが点灯し、さらにIDを促すように点滅を繰り返している。オサは左手につけている時計をかざした。すると、ロックが解除された音がして、扉が自動的に開いた。内部は壁はコンクリート製で、床は大理石でできていた。さらに、扉があり、手動スイッチで押すと、扉が開いた。そこは6畳程の部屋になっていて、全員がその部屋に入り、密封状態となった。

「ここには、放射能除去装置があり、身体をクリーンにしてから内部にはいるんだ」

しばらくすると、照明が赤外線モードになり、シューという音とともに天井と壁から何かを身体一面に浴びせかけてきた。1分ほどたつと、霧のようになった視界が開けてきた。

「除去完了」

アナウンスが聞こえ、入口とは反対側の扉が開いた。安全のためか、更に2重の扉が設置されていた。廊下はそこで終り、エレベーターが5台設置されていた。

「これから、さらに深い所に行く。地下150メートルのところだ。そこが我々の生活を

営んでいる場所だ」

「えっ、地下150メートル」

「すごい」

浩平がびっくりした声をあげ、エレベーターに乗った。

「扉が開いたら、もっとびっくりするよ」

三人はどんな世界があるのか、ワクワクドキドキだった。

二人は士官室に入っていった。

「こちらで休んでいてください。すぐにあたたかいスープを持ってきますから」

ターナー少尉が言った。そして、すぐ出て行った。二人は小さなテーブルが置いてあるところに腰掛けた。バレンタイン曹長は当然士官室が始めて入ったが、コナー少尉は、同じ潜水艦でも全然違うと思った。部屋も広く、それに空調が利いていたのには驚いた。

「ジミー、どこかおかしくないか？」

「ああ、そうかも」

「こんな潜水艦が合衆国にあったか？こんなでかいの？」

「秘密裏に建造されたのかもしれないが、見たことも聞いたこともない代物だ」

「一休みしたら、艦内を見せてもらおう」

「それはいい」

ドアのノックする音が聞こえ、スープを持った兵が入って来た。

「暖かいスープをお持ちしました。冷えた身体が温まりますよ。ごゆっくりどうぞ。飲んだら少し横になったらいいですよ。後にかかっている毛布を使ってください。では」

兵はテーブルにスープを置き、出て行った。

二人は、スプーンを持ち、スープを飲み始めた。

「ウーン、うまいなあこのスープ」

「確かに」

二人は、久しぶりに飲む暖かいスープにご満悦だった。脇に二口くらいで食べきる位のパンが置いてあった。このような状況では、あまりお腹を満たさないほうがいい。

「これだけしかないとは。全然満たされないよ」

バレンタイン曹長が不満の声をあげた。

「ケリー、漂流した直後はこれくらいで十分だ。早く済ませて休もう」

「わかりました。少尉殿」

二人は、軽い食事を済ませ、脇に置いてあるソファーに寝そべった。もちろん毛布をかけてだが、やはり疲れていたのか、あっという間に寝入ってしまった。

そんな頃、司令搭内では艦長と副長が論議していた。

「艦長、救助した二人をどうしますか？このまま連れていくとするとやはり問題です」

サッチ副長が言った。

「問題？とはどういう意味だね」

「彼らは60年前のアメリカ海軍の軍人です。歴史が歪められます」

「我々が60年前にいる。もう歪んだ世界に迷いこんでいるんだ。ただ助けたのが、偶然われわれだけだったかもしれない。君は彼らをすぐ放り出せというのか」

「すぐとは言いませんが、なるべく早くここから出すべきです」

「人道上それはできぬことだ。放り出せば、彼らに死ねと言っていると同じことになる。何のために助けたのだ」

「いや、しかし・・・」

二時間後、ぐっすり寝入っている二人がいる士官室を一人の見習士官が訪れた。コンコンとノックの音が聞こえ、「入ります」という声が室内の壁に反響していた。二人は、まだ寝ていた様子で、目をこすりながら上体を起こした。

「まだ、お休みでしたか？また、後で来ます」

「いや、いいよ。ぐっすり休ませてもらったから」

コナー少尉は入ってきた兵に目をみやりながら言った。しかし、寝ぼけていた目がはっきりしてくると、襟章が見習士官のものと分かれると、立ち上がった。バレンタイン曹長も当然気づき、立ち上がり、敬礼をした。その見習士官も敬礼をした。コナー少尉も答礼した。

「ライアン・バレンタイン予備少尉です。二人のお世話をしよう副長より命ざられました。何なりとお申しつけください」

「ジョージ・コナー少尉。よろしく」

「ケリー・バレンタイン曹長です」

その名前を聞いて、ライアンはびっくりした。

「出身は？」

ケリーが聞いた。

「ニュージャージーです」

「コロラドです。よろしく、見習士官殿」

コロラドと聞いて、ライアの心の中の驚きは、最高のもとなった。なぜなら、自分の祖父は、コロラド出身であり、第2次世界大戦で潜水艦に乗り、日本近海で撃沈されたが、かろうじて生き残った二人のうちの一であり、名前もケリー・バレンタインだったからだ。

「は、はい。よろしくお願ひします」

「どうかしたかい？」

変な挙動にコナー少尉は不審をいだいて聞いた。

「いや、別に。何か必要なものは？」

「少し、お腹が空いたから、何か食べるものを」

「はい。コックに言って美味しいものを作ってもらいます」

「コック？この艦にはコックがいるのかい」

「はい、偶然にも前にコックをやっていたのが乗っていて、そのおかげでおいしいものが食べれます。それは、私のことですが」

「それは、ラッキーだ」

ライアは士官室から出て行こうとした。

「あっ、それから」

「何でしょう？」

ライアは振り向いた。

「食事が終わったら、艦内を案内して欲しい。興味深いサブマリンだから」

「副長に聞いておきます」

「美味しいものを待っているよ」

ライアは、扉を閉め調理室に方に歩き始めたが、脳裏には祖父の事でいっぱいだった。

エレベーターはかなりのスピードで下降していった。途中で耳鳴りのような感触を受けた。しだいにスピードが弱まっていき、まもなく着くのがわかった。

チーン！

と音がして、扉が開いた。

浩平が真っ先に降りた。そして、洋次、順子、オサ、タケの順に降りた。

「右の扉が地下の入口だ」

オサの声が聞こえたので、浩平がその扉の前で止まった。そして、右手で扉を開けようとしたが、何も反応はなかった。浩平はオサの方を見た。

「セキュリティ管理されているので、そう簡単には開かないよ」

と言い、オサは右手を扉のセンサー装置らしいところにかざした。

「カクニンシマシタ」

と、音声反応があり、ガチャリと鍵が開放される音がした。

「さあ、中へ」

浩平は、扉を開けて中に入った。オサが続いて入り、浩平も順子も続いて入った。

三人は中の様子を見渡した。その場所から、さらに下に空間があり、ドーム球場のような格好をしていた。驚いたことに天井に太陽が輝いていた。

「すごいな！これは」

「あなた、まるで外にいるみたい」

「パパ、ここは地下？地上みたいだね」

「プラネタリウムを応用した施設で、天体を投影して、この地下でも太陽の恵みを受けられるようにしている。太陽エネルギーの恵みも受け、ここでは農作物を作ることができるのだ。だが、全人類を満たすには程遠いのが残念でならない。この設備には巨額の費用がかかる。

これ以外にも施設はある。この地下施設は居住区と生産区に分かれている。生産区はもちろん食料品がほとんどだ。それだけ、食糧を生産することは大変な努力がいる」

「UFOはどこ」

浩平は、興味深そうにまだ見ぬUFOについて聞いてみた。

「UFOか。ぼうや。そこの回廊に行く暫く歩いて行くと、研究室がある。そこの一角に基地がある。もういつでも宇宙に行ける状態にある。今は宇宙を自由に往来できるか開発中だ。このまま環境を維持していても、後50年もすれば、住む環境ではなくなってしまふ。太陽が活発な活動で、エネルギー発散が大きく、夏の季節は中緯度でも50度にも達する気温になる」

「そのUFOのことだけど」

浩平が聞いた。

「ぼくが見た、輝く丸い飛行物体はこのUFOなの？」

「ああ、そうとも」

五人はドームに副って伸びる回廊を歩き始めていた。

「でもどうして、ここのUFOが過去の時代に」

洋次が聞いた。

「それは、新しい装置の実験を試みていた時に起った事故じゃ」

「事故？」

「宇宙への往来は、この彗空、このUFOに付けられた名だが、彗空が自由に往来できることは十分なのだが、最近時空間があることを偶然発見したのじゃ。それは、短い時間での移動を可能にするものなのだが、コントロールするのが難しい。自然界に偶然発生するものもあるのだが、ある条件を与えると発生することがわかった。しかも、場所の移動だけではなく、過去にも未来にも行けることがわかったのだ。この彗空で君たちがいる60前にいったのだが、時空を発生する装置に故障が生じて、戻れなくなり、それが偶然にもアメリカ海軍の艦隊付近だったため、未確認飛行機ということで、撃墜されたのだ。それをアメリカ海軍は回収し、修理して飛行実験を試みていた。多分、君らはその海域近くを飛んでいたであろう」

「それで、撃墜された。これで謎が解けた。何故落とされたのかわからなかったんだ」

「丁度そのとき、われわれが状況を把握しようと空けた狭間に、君たちが不時着した。そして、入れ替わるように60年後に来たというわけだ」

「パパ、今は60年後なの。すると、ぼくは今68歳？」

「そうなるかな」

「もうお爺さんなんていやだよ」

「さあ、ついた」

オサは、新しい扉のセキュリティシステムに手をかざした。ガチッという音がして、扉が開いた。そこは大きな格納庫のようであり、10個余りの彗空が並んでいた。その隣に建造中の際立って大きな船のようなものがあった。中はガラスのようなものでさえぎられていた。

「今、大型のUFOを建造中だ。全長150メートル、幅40メートル、高さ25メートル、約800人が一年間居住できるものだ」

「こんなでかいものが、空を飛べる？飛行機やロケットと形が違う。この型は、潜水艦に似ている」

「そう、宇宙空間を飛ぶ潜水艦。計算した結果、この型が宇宙を飛び回るにはいい。海の中と同じだということが実験の結果わかったのさ」

「翼は？いない？」

「そうだ。UFOに翼はないだろう」

「でかいね。パパ」

「今、エレベーターで上の発射台に移動しているのが見えるだろう」

オサが指をさした。

「ええ」

「あそこから、この小型のUFOが出入りする。一旦上の発射台にあげてから、上の天窓を開けて飛び立つ。この中は放射能濃度が高いのだ」

「だがら、中の作業員はスッポリと宇宙服みたいのを着ているんだ」

「それでも、一日の作業時間は決められている。健康のために」

「なるほど」

「この先に、この基地の司令部がある。そこへ案内しよう」

「パパ、ここ凄いな。まるで映画の世界みたいだね」

「ああ、そうだ。しかし、今見てるのは映画じゃない。現実だ」

三人はオサに続いて、歩き出した。浩平はずっと格納庫が見えなくなるまで見続けていた。

ライアンは従兵に食事の準備をするよう伝えるとともに、司令室に向った。ライアンの頭の中は混乱していた。予測できない状況におちいったとき、人は混乱状態になる。戦闘に入ったときはそうなるだろう。そのために日々訓練をして不測の事態に備えている。しかし、この状況はそれを逸脱した事柄だった。

(一体この艦に何があったんだ。艦長から何も具体的な話はない。60年前の祖父。突然の戦闘状態。この艦はいまどこにいるんだ)

そんなことを考えながら、向っていた。

「バレンタイン予備少尉。入ります」

「ライアンか」

サッチ副長が、少尉を目で確認した。艦長もライアンの方を見た。

「入りたまえ。何か用か」

「お話ししたいことがあります」

「今は緊急事態で立て込んでいる。あとでいいかな」

「いいえ、さっき救助され士官室にいる二人のことで、副長の耳にいれたいことが」

「あの二人のことで？」

「はい。できれば内密に」

捨て置きがたい申し出に、聞く事を拒む理由はなかった。副長は艦長の方を見てから、ライアンを連れて司令室から出て、扉を閉め数歩いったところで止まった。艦内はまだ臨戦態勢なので、赤い誘導灯が点灯しているだけで、薄暗かった。

「副長、大変なことがわかりました」

「なんだ？」

「その前に聞いておきたいことがあるんです」

「言ってみたまえ」

ライアンはまだ興奮状態にあったので、大きく息をして落ち着かせようとした。

「今、この艦はどこでどこの国と戦っているんですか。もしかして60年前の日本ですか」

「今この艦がどのような状況にあるか全くわからん。ただ言えるのは、撃沈したのは、日本の駆逐艦であり、先ほど助けた三人は、沈められたアメリカ海軍の潜水艦の乗組員だということだ。しかも60年前のことだ。君の言うとおりで」

落ち着かせようと思って見ても、心の中はますます興奮してくるのをライアンは覚えた。

「何故、ライアンはそう思ったんだ。あの二人と何をしゃべった？」

「ただ、身の上話です。挨拶したら一人がケリー・バレンタインと名乗りました。その名前を聞いて驚きました」

「バレンタイン？親戚だったのか」

「それも、私の祖父と同じ名前だったのです。念のために出身を聞いて見ました。祖父から、聞いたことを思い出したのです。潜水艦が撃沈され、たった二人が救助されたことを祖父に間違いありません。祖父は昨年他界しましたが、どうして、若いころの祖父に会うことができるのでしょうか。夢でありますか」

「いや、残念ながら、夢ではなく現実の事だ。しかし、君の祖父と出会うとは。どう言ったらいいか。言葉もないよ。せいぜい祖父をもてなすことだ。だが、決して孫だというこ

とを気づかれてはいけない」

「はい、わかりました」

サッチ副長はこんな偶然があつていいものか、驚きのあまり声を失っていた。

「副長。このことは他言は無用です」

「わかっている」

「では、持場に帰ります。これから腕によりをかけて旨い物を作りますから。二人のために」

「そうだな。そうしてやれ。最高のものをつくるがいい」

「アイアイサー」

ライオンは副長との話が終ると、急いで戻り始めた。サッチ副長も司令室内に戻った。

サッチ少佐は考えていた。こんな偶然があつていいものだろうか。60年前の世界。そして、目の前に現れた60年前の祖父との出会い。現実か幻か、はたまた夢か。でもいくら考えても、目に入るものは現実のものとしか言えなかった。今は、その現実としっかり向き合うしかなかった。

司令塔内では、再び異変が起り始めていた。

「艦長！レーダーが異常です。他の計器にも異常が見られます」

「故障か？」

「いいえ、わかりません」

「すぐ調査しろ」

「はい。あっ、正常に戻りました」

一旦、すべての電子機器が異常を示したが、すぐ元に戻った。そこへ、副長が戻ってきた。

「副長。コンピューターに異常がないかすぐ調べてくれ」

「どうしました艦長」

「今、すべての計器がおかしくなった。すぐ直ったがね」

「わかりました」

「副長、ひょっとしたら、大きな電磁波層かもしれません。タイムスリップする前の現象と似ています」

電子機器担当のビスコッチ曹長が、計器の異常は、単なるトラブルではないということ

を言った。

「艦長、60年後に戻るのはもうすぐかもしれません」

艦長はニヤリとして頷いていた。

洋次たちは、格納庫を出て、オサの後に続いてまた長い廊下を歩いていた。300メートルほど行くと左手に扉があり、そこを開けると螺旋状の下りの階段があり、降りていった。階段の数は100段余りあった。そこに扉があり、そこを開けるとまた長く延びる廊下があった。

「パパ、長い廊下だね」

浩平は、あまりにも長い道のりに疲れはてたのか、沈んだような声で言った。

「もうすぐ着くんじゃないかな」

「坊や、歩き疲れただろう。そこの扉を開けた所だ。中でゆっくり休むといい。椅子があるからな」

扉を開けると、衛兵が二人中扉の両脇に立っていた。オサが身分証を呈示すると、衛兵が敬礼した後、扉のスイッチを押した。扉が両側に開き、広いスペースの部屋があり、何人かが動き回り、何人かが座ってコンピューターに向っていた。

「洋次、司令室に案内する。ここの長官に挨拶しよう。二番目の部屋が司令室で、隣合に長官室がある。そこのいるはずだ」

「ここの司令長官？一つ聞いていいですか？」

「何だね。言ってみたまえ」

「国家、いわゆる国とかが存在し、首相とか大統領はいるのですか」

「今は国家というものは存在しない。社会共同体であり、その住んでいる地域は限定されている。60数億いたとされる人類も、今は10億にも満たないだろう」

「すると、ここで生活している人たちの数は？」

「一万もいないだろう」

「そんな」

洋次は改めて、あまりにももの変貌のすごさに落胆し、ちょっと沈んだ気持でオサに続いて司令室に入っていった。順子と浩平は椅子に座っていた。

司令室に扉の横で立っている衛兵が二人を確認すると、敬礼をして扉を開けた。

「お待ちかねです。中へどうぞ」

オサに続いて洋次は中へと入っていった。奥の大きな机のところに精悍そうな、逞しい

顔つきの司令官が座っていた。二人を見ると立ち上がり、前に置いてあるすわりごちのよさそうなソファに座った。

「ようこそ。佐々木洋次さん」

「あっ、どうも」

二人は握手をかわした。

「わたしは、ここの司令官で、菊池と申します。どうぞ、おかけください」

洋次はソファに座った。予想したとおり、座りごちのよいソファだった。

「あなた方ご家族三人は偶然にもわれわれのおこした時空に遭遇し、タイムスリップしたようだ。あなたの操縦する飛行機というものが、墜落したことによりますが、その前に何か見たりしましたか」

「ええ、よく覚えております。私たちは、私が操縦して観光遊覧を楽しんでおりました。浩平が、私の息子ですが、前方にUFOみたいな円盤が飛んでいるといいました。私もチラッと見たのですが、はっきりするためにもう少し近づこうとしたのです。それがはっきりと円盤だと判る頃に、後方から多分アメリカのだと思いますが、戦闘機がやってきて、私の機を撃ったのです。そして、操縦不能になり、海上に不時着してゴムボートに移った時、渦巻きに呑み込まれ、気がついたら見たこともない、海岸についていました」

「わかりました。あと、明日朝に出発する円盤がありますので、それで、過去に送り届けます」

「ほんとうですか」

「ええ、ほんとうです」

「アメリカ軍は多分、われわれの円盤が故障で不時着したのを回収して、実験していたのでしょう。すごい武器ともなりますから。われわれは、その円盤を破壊するために明日にでも出発するのです。でないと、歴史が歪曲してしまう可能性がある」

「でも、現実的には人類の危機を迎えて、現在の状況があるわけですよね。どちらにしても危機を迎えるのは同じではないのでしょうか」

「いや、結果は同じとは言えない。さらに悪い状況になっているかもしれない。今ここに一万人の人間が生きているが、残っていないかもしれない」

「反対にもっと残って入るかも知れない」

「その結果は予測できませんよ。佐々木さん。われわれとしては、現在の状況より悪くなることは避けたい。だから、円盤を回収または破壊する」

「えっ、わかりました」

「では、出発まで別室でくつろいでいてください。準備が整い次第お呼びします」

ライオンは司令室を出ると、調理室に向った。そこでは、調理をする相棒のロイド一水が下準備をしていた。

「ウーン、いいにおいだ。だいができているようだな」

「はい、ライオン殿。この煮込んだスープは絶品ですよ」

「もちろんだ。とっておきのレシピだからな」

「肉は特製ダレに漬け込んであります」

「ありがとう。じゃ、一腕振るうか」

ライオンは、フライパンを取り出すと、火をつけて油を少し注ぎいれ暖めた後、特性ダレにつけこんだ肉をフライパンに乗せた。ジュウージュウーという音とともに、湯気があがり、香ばしい匂いが漂った。

「ウー、たまらない匂いだ。こりゃうまそうだ」

ロイドが呟いた。

「お前にも少し分け前はあるよ」

「ほんとうですか。こりゃ最高だ」

「パンを四切れほど切ってくれ」

「もう用意できてますよ」

ロイドはパンが乗った皿を手にとって見せた。

「手回しがいいな。優秀なコックになるよ」

「よし、出来たッ」

ライオンはロイドが用意した皿に焼きあがった肉をいれ、茹でてあったジャガイモを横に添えた。盆の上に、肉の皿、スープ皿、パンの皿に乗せた。二つ出来上がった。

「完璧ッ！ロイド、運ぶぞ」

「はい」

二人は出来上がった料理を持ち、士官室に向った。

電子機器が正常に戻った司令塔内では、再び新たなる危険が迫っていた。

「艦長！8時方向より、飛行機が迫っています。距離200（20,00フィート）速度

200ノット。対潜哨戒機かもしれません」

「よし、潜ってここは避けよう。緊急潜航！深度250（フィート）」

「緊急潜航急げ！」

タンク内に海水が注水され、シーライオン号は150フィートから250フィートへと潜った。150フィートの深さでは、上空から船影を発見されてしまう恐れがあるからだ。200フィート以上に潜れば通常肉眼では発見できない。

「未確認飛行機、ただ今通過中」

司令塔内では、皆黙って飛行機の動向を見守っている。レーダー監視員の報告を待つだけである。

「対空ミサイル準備！」

「了解」

しばらくすると、レーダー監視員から報告が告げられた。

「未確認飛行機、10時方向に去っていきます」

「よし、戦闘準備解除。警戒態勢」

「艦長。念のため、しばらくはこの深度を維持していくほうが」

「そうだな。針路変更180。前進微速」

そして、30分後、再びレーダーに反応が現れた。

「副長！1時方向に未確認飛行機ですが、探知しました。距離80マイル。飛行高度は5000フィート。速度160ノット。4時方向に向っています」

「艦長。味方ですかね」

「そう、願いたいね。何か通信の手段はないかね」

「戦時中は暗号解読を恐れ、平文を結構使用していたと聞いてますが」

「よし、一度やってみるのもよかろう。浮上！潜望鏡深度」

「了解。浮上します。メインタンクブロー！浮上。上舵20度」

ブー、ブーとブザー音が鳴り、圧縮空気により、海水が排水され、ゆっくりと浮上を始めた。

その頃、士官室内の救助された二人は、ライアンの作ったごちそうを食べ終わろうとしていた。

「いかがでしたか？」

「うーん。いや、久しぶりにこんなうまいものを食べたよ。まさか、潜水艦の中で食べれ

るとは思っても見なかった」

コナー少尉が満足そうに、微笑を浮かべながら言った。人はうまいものを食べ満足すると笑顔になることをライアンは、経験から知っていた。

「こんなおいしいものは、二ヶ月ぶり、いや三ヶ月ぶりかも。ハワイを出港する以来かな」

バレンタイン曹長も満足げに言って、ナフキンをテーブルの上に置いた。

「他になにかいるものは」

「いや、もう十分だ。ところで、この艦の中を案内してもらっていいかな。ライアン」

コナー少尉がライアンの方を見て、それから曹長の方を見て言った。曹長もそれはいい考えだというように、頷いてから軽く言った。

「食後の散歩にちょうどいい」

「わかりました。それじゃ。まず、司令塔に行って艦長に会いましょう」

「それはいい考えだ」

二人はゆっくりと立ち上がった。

佐々木洋次ら家族3人は、立派な部屋に通されて、そこでくつろいでいた。飲み物や食べ物は冷蔵庫の中にびっしりと詰め込まれており、なに不自由することはないということだけはわかった。ソファーに座ってくつろぐことはできても、何かおちつかなかった。

「漫画やテレビはないんだね」

浩平は、いつも見ている漫画やテレビが、部屋にないことが唯一の不満だった。突然、部屋のベルが鳴った。静寂の中から鳴ったので、三人ともびっくりした。

「何かしら？」

順子はかつての違う部屋でソファーに座り、鳴っているベルのほうを見ながら言った。

「僕が出るよ」

洋次はソファーから立ち上がり、ベルが鳴っている装置のところに行ってみた。ボタンが点滅していた。ここを押せばいいのかなと思いながら、そのボタンを押した。その前に置いてある小さなディスプレイが付き、先程の菊地司令官だった。

「佐々木さん、出発は明日朝8時に決まりました。それまでゆっくりとそこでおくつろぎください。今、夕食をお持ちします。たいしたご馳走はありませんが、お召し上がりください。では、また明日朝お会いしましょう」

「お心遣いありがとうございます。ではまた明日に」

ディスプレイの映像は消え、しばらくするとドアのチャイムが鳴った。

「はい」

「夕食をお持ちしました」

扉を開けると、ワゴン2台に乗せられた豪勢な食事が運ばれてきた。

「ワー、すごい！」

浩平はテーブルに並べられていく、ご馳走の皿に目を丸くして見つめていた。浩平のお腹がクゥーと鳴った。順子も急にお腹が空いていたのを感じていた。洋次も口の中にたまりかけているよだれをゴクリと飲んでその様子を目を輝かせて見つめていた。

「すごいなー、このご馳走は。ありがとう」

テーブルに並べ終わった料理を眺めて、洋次はお礼を言った。

「いいえ、最高のおもてなしをするようにと言われておりますので、お気遣いなく」

「さあ、座って食べよう」

「はい」

「うん」

洋次が座り、隣に浩平、そしてその隣に順子。浩平を挟むようにして椅子に座った。どれから食べようか迷うほどだったが、順子が

「やはり、スープからね」

というや、順子がスープの鍋をとり、三人のカップにスープを注ぎ出した。その香りに三人の食欲はますますかきたてられた。あとはもう、お腹いっぱいになるまで、食べるに食べたという感じであった。

「ウー、食べたッー」

「パパ、もう僕お腹が一杯ではちきれそうだよ」

「私ももうだめッ」

三人はしばらくソファーに座りくつろいでいたが、満腹感のせいかわ深い眠りへ陥り、微かな寝息が部屋に響きだしていた。

海面近くまで浮上したシーライオン号は、飛行機の波長に合わせて平文を打ってみた。

「向こうの電波は拾えるのですが、こちらのものには全く応答がありません」

「ダメか？」

「艦長。浮上して信号を送ってみましょう」

「そうだな。やってみよう」

「航空機遠ざかりつつあります。距離40マイル」

レーダー観測員より経過がもたらされ、その結果はあきらめざるを得ないということだった。

「今日はあきらめよう」

しかし、上空を哨戒していたカタリナ飛行艇では、奇怪な電波をキャッチしていた。

「どうとりますか大尉」

飛行艇の副操縦席に座るガードナー大尉は、その電文を見て判断に迷っていた。

「味方の潜水艦からのものか」

「多分、しかし、この符丁がわかりません。敵の偽電かもしれません」

「内容はどんなものだ。少尉」

「読みます。至急救援を乞う、シーライオンより。位置御前崎南120マイル」

スティープン少尉は、読み終わると大尉の方を見た。

「シーライオン？潜水艦か？至急司令部に問い合わせてみる」

「わかりました」

「トミー、その御前崎南120マイルはどのあたりだ」

航法士のトミー兵長に大尉が聞いた。

「ここから約50マイル北北東です」

ガードナー大尉はその場所が、ここから50マイルしか離れていない、であれば捜索してもいいと思ったが。

「帰りの燃料は？もつか」

「ギリギリの所です。現場では5分ぐらいで捜索を打ち切らねば、こちらが不時着です」

クソッと大尉は思ったが、すぐ決断しなければならなかった。もし、遭難者がいるとすれば、今いかねば助かるまい。次の哨戒機は5時間もあとだ。

「よし、反転する。針路020」

「了解しました」

操縦士のパウエル中尉は機を旋回させた。

「高度5000フィート、スロットルを絞り、燃料を節約するんだ」

「はい」

大尉は、この飛行艇がどの高度を飛び、どのくらいのスピードで飛べば、燃料消費量が最小に押えられるかよく知っていた。パウエルも大尉の教えのまま、十分にその腕を発揮していた。

「よし、いいぞ。これでさらに5分はかせげる」

ライアンは再び二人を伴って司令室を訪ねていた。

「艦長。ライアンです。入ります」

「何だね」

「是非この艦内を見て回りたいというので、案内したいのですが。この艦に十分興味があるようで、初めてみるものばかりと」

「そうだろうな。いいだろう」

「レーダーに航空機を捕らえました。先程反転していった航空機のようなのです」

レーダー観測員が再び点滅した目標を捕らえていた。それは、先ほど遠ざかっていったものようだった。電波を捉えていたのだった。だが、その時である。電子機器が異常を示し始めた。

「レーダー点滅しています。装置異常のランプが点滅しています」

「ソナー音探知異常！」

「敵艦接近の非常警報作動！」

ビー、ビー、ビー

「潜望鏡上げ」

サッチ副長が艦長にかわって、潜望鏡で外の様子を見た。外は霧がかかったように霧が出ていた。波も何か泡だっているようだった。

「艦長！海上はもやって視界は不良です。1マイル先しか見えないでしょう」

艦長が戻ってきて、潜望鏡を覗いた。

「こんな現象は始めて見るな」

「はい」

「ひょっとすると、磁場の変化で元に戻るかもしれない。この機会を逃すと、われわれは歴史に埋もれてしまうかもしれぬ」

「ここは、戻ってきた航空機にかけようと思う」

「??」

サッチ副長は何をいっているのかと思ったが、すぐ察知した。

サッチ少佐は潜水艦バーダー号の二人の乗組員の前にまで一狭い通路を司令塔の扉のまで一歩んでいった。

「二人には折角救助したのに申し訳ないが、再び海上へ行ってもら。近くまで救難用の飛行艇が来ている。それに拾い上げてもらう。君たち二人をこのままこの艦に留めおくことはできない。見ての通り、この艦は全く見たことがない艦だと思う。それは60年も未来から来たのだから、見るもの全てが驚くことばかりだろう。詳しく話していることはできぬが、あやまって60年前に来てしまった。60年後に帰還する時が近づきつつある。君たちと別れることは辛いことだが、幸運を祈る」

「まったく、この司令塔内を見るだけで、別世界に来たような感じです。この艦が無事帰還することを祈ります」

コナー少尉が答えて、バレンタイン曹長とともに敬礼をした。サッチ少佐が答礼を返した。身体を返して、ライアン少尉の方を見て言った。

「ということだ。少尉！直ちに上甲板にボートを用意し、二人を解放せよ」

「アイアイサー」

サッチ少佐は、ライアンがバレンタイン曹長の孫だという話を信じ、ライアンに最後の別れを命じたのだった。

ポポッ！ポポッ！ポポッ！と、部屋に軽快な高い音が流れた。起床を促す音だった。三人が今まで寝室で聞いていた不愉快な目覚まし音ではなかった。いつもそうだが、洋次が一番最初に目を覚ました。

「ウーン、今何時だ？」と呟きながら、部屋に壁にかかっている時計を見た。丁度7時だった。

（もう、7時か。早いなあ）と思いつつ、部屋の中を見渡した。いつもの部屋でないけどと思いつつ、アッそうだ。と現実のことを思い出していた。起きれば夢であってほしいと思っていたから余計にそう思えた。

「順子！浩平！起きろー。朝だぞー」

「あー。もう朝なんだ。ご飯つくらなきゃ」

「お前も寝ぼけてるな。ここは家と違うよ」

「アッ！そうだったわね。夢じゃなかったのよね」

「ふふ」

洋次は順子が同じように夢だといいと感じていることに笑いを覚えた。浩平が目をこすりながら、起き上がろうとしていた。順子が何故笑ったのという表情を見せた・

「パパ。まだ眠いよ」

「同じことを思っているんだと感じたらちょっとおかしくなって」

「まあ」

「さあ。起きるか」

ベッドから立ち上がると、壁にかかっている20インチほどのモニターが明るくなり、菊地司令官の顔が浮かび上がった。

「おはようございます。佐々木さん」

「おはようございます。菊地さん」

「お・は・よ・う・ございます」

浩平が寝ぼけたままの表情で言った。

「おはよう。浩平君だったね。今日は快適な旅になるよ。佐々木さん！じきに朝食が届きますから、朝食が済みましたら、お迎えにあがります。では、よい一日を」

「ありがとう。司令官」

しばらくすると、朝食が運ばれてきた。卓上に並べられた料理は、ご飯に味噌汁、何の魚かは分からないが焼き魚、玉子焼きに納豆だった。

洋次は60年後も納豆が存在していることを知った。そして、この大豆がたいした健康食品であることも確信したし、日本の文化が続いている安心感を覚えていた。

「ごちそう様でした」

三人は十分な朝食に満足し、感謝の意味を込めて、ごちそう様と言った。

しばらくすると、ノックする音が聞こえ、扉を開けるとお迎えにあがりましたということだったので、出かける支度をした。といっても、何も持つてはいなかったし、衣服も支給してもらっていたので、上着をはおるぐらいだった。

「さあ、行きましょう。ついてきて下さい」

先導する20代らしき若者は、さっそうと先を歩いて行った。しばらく歩くと、昨日見学したUFO基地の入口に到着した。中に入ると、菊地司令官が待っていた。

「お待ちしております。佐々木さん」

「よろしくお願いします」

洋次は右手を差し出して握手を求めた。菊地は笑顔を浮かべながら、右手を差し出して答えた。

「何も心配することはありません。準備は万端整っています」

「短い間だったのですが、大変お世話になりました。ありがとうございます」

「そんなことはありません。こちらの行為でご迷惑をおかけしたことになってしまったわけですから、申し訳ないと思っています」

「ですが、あの不時着した時、奇怪な現象が起っていなければ、死んでいたかもしれませんから、こちらこそ幸運だったと思っています」

「そう言っていたいただければ助かります」

制服を着た一人の頼もしい青年が近づいてきた。そして敬礼をしてから言った。

「司令官、準備完了です」

菊地司令官は青年の方を向いて答礼し、ご苦労と言い、洋次の方を向いた。

「こちらの青年は、今からあなた方が登場する機のパイロットです。若いですが、なかなか優秀な青年です」

「よろしくお願いします」

洋次は笑顔を浮かべて青年に言った。

「無事送り届けます。ご安心ください」

青年は司令官に敬礼して背を向けると、機に向かって足早に向った。違う方から女性が歩いてきた。

「今日、あなた方をアドバイザーする有馬君です」

「よろしくお願いします」

有馬優子は三人に微笑みかけた。

「さあ、ご案内します。行きましょう」

「では、司令官。ありがとうございました。お元気で」

「はい。あなた方もご無事を祈っています」

4人はゆっくりと歩いて搭乗するUFOに向っていった。

艦長は艦の浮上を命じていた。

「浮上する」

副長のサッチ少佐は見張員に待機するよう命ずるとともに、ゴムボートを上甲板ハッチ下で待機するよう支持していた。

ライアンは突然訪れた二人との別れにとまどいながら挨拶を交わしていた。それも一人は祖父であり、もっとゆっくり会話をしたいと思っていたからだ。

「もっとゆっくり話をしたかったです、残念です」

「いや、わたしもそう思います。おいしい食事でした。久しぶりに満足したものを口にしました。感謝します」

コナー少尉がそう賛辞の言葉を与えた。バレンタイン曹長も同じだった。

「特に最初に飲んだスープは格別だったよ。ありがとう」

「そう言ってくれただくと嬉しい限りです。幸運をお祈りします」

「あたたも」

三人はしっかりと握手を交わした。

「浮上完了！準備にかかれ」

艦内マイクから報せが響きわたる。ここからは迅速にことを運ばねばならない。訓練通りにやればよかった。

「ハッチを開けろ」

シュッと艦内の気圧がやや高いために空気が外に漏れる音が響いていた。一人の兵員がハッチを開けて、上甲板に出た。

「異常なし」

上から艦内に向かって叫んでいる。

「よし、ゴムボートを上げろ」

「二人を甲板に」

ライアンが先に甲板に上がり、コナーそしてバレンタインが上がってきた。ライアンは二人を上げる為に手を差し出して、二人が甲板上に達した後、艦の周囲を見渡した。

(すごい霧だ)

視界は1マイルほどしかきかないと思われ、しかも徐々にその白い濃さは増していた。

「幸運を祈ります」

ライアンはゴムボートに乗り移る二人に握手をした。

「あなたとこの艦の無事を祈ります」

ゴムボートは波に揺られるまま、艦からゆっくりと離れていった。ライアンは敬礼して

それを見送った。ふと艦橋をみると、艦長と副長も敬礼して二人を見送っていた。ゴムボートは霧の白さに包まれてその陰は薄くなっていった。

洋次らは有馬優子に連れられて、格納庫から引き出され準備されていたUFOの前についた。ダークグレーに塗られた機体は、異様な感じに見えた。洋次はアメリカが持つステルス爆撃機を連想していた。機の入口には搭乗するクルーの一人が立っていた。ふと、上を見上げると先程の若いパイロットが発進準備をしている光景がうっすらと見えた。

「どうぞ、こちらから上がってください」

機の中央に上る階段があった。そこから機内に入るらしかった。

「ちょっと、入口は狭くなっていますので、頭をぶつけないようにしてください」

有馬が注意をして、三人を階段に手招いた。

「浩平、先に上るんだ」

洋次は浩平を先に登らせようと、手を掴んで自分の前に送り出した。

「うん」

浩平は、（すごいな）と言いながら階段を昇り、機内へと進んでいった。洋次もその後続き、順子も続いて登っていった。中は、10人ほどの席があり、その席も座りごちの悪そうなものではなさそうだった。中には三人のクルーが乗っていた。

「ようこそ、雷電号へ」

その名付けられた機名の通り、壁にはカミナリをモチーフにした機章が書いてあった。

「こちらへおかけください」

あとから入って来た有馬が席に誘導した。そこは一番後尾の席で、三人席になっていた座ってみるとゆったりとした感じで、ジャンボのファーストクラスにひけをとらない感じだった。

「パパ、この席最高だね。だけど外が見えないのが残念だけど」

浩平に言われて洋次は見渡すと、なるほど窓は全然なく外は全く見えなかった。

「安全性の考慮から窓はほんの一部しかありません。操縦席と前の床のハッチの下です」
ブザーが鳴った。

「間もなく発進します。シートベルトを着用してください」

三人は有馬に言われる通り、座席のシートベルトを締めた。それを確認すると、自分も座席に座り、席に備えてあるマイクで操縦席に連絡していた。

「パワーオン」

「作動状況異常なし」

エンジンがうなりをたてていて、機体が震動を始めていた。車止めが外された。

「エアブレーキオフ」

機体がゆっくりと動き始めた。機体は歩くぐらいの速度で前進し、格納庫みたいなどころには行っていった。当然、洋次たちのところからは何も見えない。機体は止まり、エンジンの音が小さくなった。

「機体シールドよし。格納庫閉鎖」

外でガーガーという音が響いていた。格納庫の扉が閉まる音だった。

「閉鎖完了。注水開始」

ザーザーという音に変わった。

「パパ、この音なんの音？」

「さあ」

洋次にもわからなかった。当然飛ぶのだから、空中に行くものと思っており、まさか、海中に行くとは思ってもみなかったからだ。

「ちょっと説明しますわ」

有馬優子が後ろを振り返り言った。

「この基地は地中に作られており、このドックから海中に向けて発進してワープ作業に移ります。海中の方が一時的なプラズマ発生が強力に生じるからです」

「パパ、何のこと？」

「まあ潜水艦みたいにこのUFOは海の中に行くということさ」

「すごい！」

「注水完了！前方発進カタパルト開放」

ガーという音が海水を伝わって振動とともに聞こえてくる。

「前の扉が開いていよいよ発進です。少しショックを感じますから気をつけてください」

有馬が微笑みながら説明して前を向き直り座った。

「準備完了。発進！」

ボン！ という音とともに機体は勢い良く前に進んだ。体が一瞬後にやられた後、反動で前のめりになった。

「あっ！」 「きゃっ！」

浩平と順子は思わず叫び声をあげてしまった。雷電号は海中を進んでいた。

ガードナー大尉は海面を凝視していた。

「現場地点まであとどの位だ？」

「あと10マイルぐらいと思います」

航法士のトミー兵長が海図を見ながら答えた。

「霧が段々濃くなってきましたが、どうしますか？」

操縦桿を握るパウエル中尉はそういって、しだいに白く覆われつつある空間に不安を覚え始めていた。

「もう少し先までいってみよう。高度を下げろ。計器をよく注意して飛ぶんだ」

「はい、高度500フィートまで下げます」

飛行艇は高度3000フィートから一気に高度を下げた。霧は海面近くまでたれこめていた。が、少しは視界があった。何とか300フィート先までは見えた。

「夜間照明灯をつけるぞ」

ガードナー大尉は照明灯のスイッチを入れた。前方の海面にライトが照らされた。ライトが霧にあたり光が筒になったように見え、それが霧の間を彷彿とさせた。

コナー少尉とバレンタイン曹長は、ゴムボートに揺られながら海上を漂っていた。救援の飛行機がもうじき現れるはずだと聞かされ、海上に放たれた二人だったが、霧の覆われた海上を漂う気分は、不安しかなかった。

「少尉殿、救援機はほんとうに来るのでしょうか」

「あの潜水艦の装備は、われわれの潜水艦と違い夢のような装備を持っている。どんな悪天候でも航行可能な艦だ。その彼らが言うのだから間違いあるまい。ただ、この霧だ。果たして見つけてくれるかだ」

「でも、どうして彼らはこんな霧の中へ我々を放り出したのでしょうか」

「それはわからぬが。よほどの理由があるのだろう」

そんな時、かすかに音が聞こえた。

「ケリー、今何か聞こえなかったか？」

「いや、別に。何ですか？」

「静かに！耳をすませて」

二人はじっとしてゴムボートに当たる波音以外の音を聞こうとした。そう、かすかにプロペラの回るエンジン音が聞こえた。

「近くに、救援機が来ているぞ」

「はい、聞こえます」

「どこだ？」

二人は霧に覆われた360度をぐるぐると見渡し、注意深く、音が聞こえるほうを見ようとしました。その音は徐々にだけど大きくなっているような感じがした。

「こっちの方から来るぞ！」

かすかだが光の光芒が揺れ動いているのが見えた。高度を低くして飛んでいるのだ。これならば見つかるかも知れない。

飛行艇は高度500フィートの低空を、速度を100ノットまで落として飛んでいた。光の光芒の中にかすかだが何か黒いものが見えた。

「大尉！10時方向になにか見えます」

ガードナー大尉はその方向を凝視した。たしかに何か霧の中にうっすらと見えるが、ライトの届かない範囲なのではっきりとわからない。

「旋回して正面に入るようにしろ」

パウエル中尉の方を向き、肩を叩いて、旋回して正面になる方向を指で示した。

「ラジャー」

注意は了解と親指を立てて合図し、その方向を見て、機を操る方向を瞬時に描いた。機をしばらく右旋回させた後、左旋回に入り、その目標が正面になるよう操縦した。霧のため正確にはできないかもしれないが、そこは経験の感であった。

（これでいいはずだ。どうか見えますように）

中尉は心の中で祈りながら、直進した。高度をさらに低くし400フィートを指し示していた。光は完全に海面を捉えている。それに霧も少し薄らいでいるようだった。

パウエル中尉はギリギリまで速度を落としていた。白い中にオレンジ色のゴムボートが見えた。二人が乗っていたのがはっきりと見え、手を振っていた。

「少尉、エンジン音が聞こえます。あっ、光がかすかに」

バレンタイン曹長は指を指していた。

「おう、見えたきたぞ。ケリー！」

二人は、両手をふって飛行機に合図した。

「これで助かったぞ」

「あの艦長が言っていたことは本当だったんですね」

「ああ」

ゴムボートに乗せられた時は、さすがに二人は本当に救援機が近くまできているのか不安で、このまま漂流して死ぬのを待つのではないかと思っていた。

「中尉！着水できるか？」

ガードナー大尉は聞いた。

「多分大丈夫でしょう。波は高くはないですから」

「うん・・・着色弾でも落としてみるか」

「それより赤の発炎筒がいいと思いますが。着色弾だと多分見えないかも」

「よし、旋回して落としてみよう。それから着水だ。おう、ロイ！」

大尉は機内マイクでロイド兵曹を呼んだ。

「イエッサー、何でしょうか」

「投下、と言ったら、赤の発炎筒を落とすくれ」

「アイアイサー、容易いことです」

しばらくすると、機は180度旋回して、再びゴムボート上へと向かった。

「よし、見えたぞ」

「視界もよくなってきました」

「よーし、投下用意！」

「準備よし」

「投下！」

「投下」

発炎筒がゴムボートの横10メートルぐらいの所に落ち、赤い炎と煙を上空へ放ち始めた。

「よしッ、着水するぞ」

「旋回して、着水します」

中尉は機を再び旋回させ、着水態勢に入った。さらに先ほどより、霧が薄くなり、視界

は1000フィートほど利くようになっていた。

「高度50、速度85ノット」

「見えた！」

赤い煙が立ち昇っているのがうっすらと見えた。飛行艇は、着水してフロートから水飛沫があがり、細かい吹き上がった水飛沫がプロペラに叩かれてさらに細かく上へ舞い上がっていた。スピードが徐々に下がると同時に、その飛沫の吹き上がり方も小さくなっていった。ゴムボートが段々と大きくなり、乗っていた二人が盛んに手をふり、抱き合っているのが見えた。

ライアンはしばらくの間、霧で二人が見えなくなってもじっと見送っていた。瞳は涙で濡れていたが、袖でぬぐうと足早にハッチから艦内に戻った。ハッチが閉められた。

「副長！ありがとうございます」

ライアンはサッチ少佐に敬礼しながら言った。

「ライアン、祖父のいい思い出になったな」

「はい、でもいくら考えてもなんだか変で、どうしたらいいか困ってしまいます」

「私と同じ立場でも、やはり混乱していただろう」

「ありがとうございます」

「副長、すぐ司令室にもどってくれ」

艦内スピーカーから流れる艦長の声だった。緊急を要する声だとすぐわかった。

「ライアン、元気を出せ」

「はい」

サッチ少佐は司令塔へと急いで向った。その時だった。

その少し前、司令塔内では大きな異変を感じていた。

「全ての電子機器が異常を起こしています」

「ソナー探知不能！レーダー探知不能！自動操縦装置不能！」

「手動に切り替えよ」

艦が微妙に揺れ始めていた。そして、艦内の電燈が点滅しはじめ、非常灯にかわった。

「艦内電圧低下！」

「艦長！手動に切り替えましたが操作不能です」

「速力12ノット」

「機関室より司令塔へ」

「何だ？」

「出力低下中！原因不明」

「急速浮上する！」

「メインタンクブロー！浮上せよ」

「メインタンクブロー！浮上します」

スイッチを押したが何も反応はなかった。

「メインタンクブロー、できません」

「もう一回やってみろ！」

「アイアイサー」

もう一度やってみたが、何の変化もなかった。

「だめです！」

「手動に切り替えてみたまえ」

「はい」

それでもやはりだめであった。

「機関室より、司令塔へ。出力停止！機関停止です！」

艦はかなりの揺れを感じはじめ、つかまっていなければならないほどになっていた。そこへ副長が戻ってきた。

「艦長、どうかしましたか？」

「艦の機関が止まり、操縦も不能だ。浮上も試みたができない」

「艦長！ひょっとして60年後に戻れるのではないのでしょうか」

「そうかもしれぬ。ここは神に願うだけだ」

雷電号は順調に海中を進んでいた。

「現在の速度、30ノット。時限空間移動のため電磁装置作動開始。衝撃に備えてください。30秒前」

機内にアナウンスが流れる。

「基地から海上に向けて、強力な電磁波による通路ができるの。そして、この雷電号からも違う電磁波を出すと、高出力なエネルギーが発生し、時空を飛び越えることができるの

です。それは、過去にも未来にも行けるし、宇宙空間にも移動が可能なの」

有馬優子が洋次に向って振り向きながら言った。

「もうじき衝撃がくるわ。それが終れば、60年前よ」

「5秒前・・3・2・1・0」

機体が震動を始め、人体にもものすごい重力というか衝撃波を感じ始めていた。しかし、その時である。ドーンという違う衝撃を感じた。というより、なぐられ翻弄されているようだった。機体が回転して、海水がものすごい勢いで中に流れ込んできた。

「異常発生！」

「何だ？どうしたんだ？」

「何かとぶつかったようです！」

「あー」

操縦席からの通話は途切れた。

洋次たちも座席から放り出されていた。有馬優子は頭を打ったらしく失神していた。一人の男性が立ち上がり、洋次に言った。

「こちらから脱出してください」

男が指し示す処には緊急脱出装置と書いてある、非常ランプが照っていた。機体の翻弄は少なくなっていたが、流れ込む海水により海中深く沈みつつあるのがわかった。

洋次は順子と浩平を手に取りその脱出装置の入口へ急いだ。短い距離だが何度も倒れながら起き上がり到着した。その時、小さな爆発が起こり、機体を揺さぶった。

「急いで！」

先に浩平が入ったが、さらに大きな揺れがおきて、洋次と順子のははじき飛ばされて、少し遠のいてしまった。

「あなた、動けない！」

洋次が順子の様子を見ると足が挟まったような状態で動けなくなっていた。必死になって洋次はその邪魔しているものを取り除こうとしたが、そう簡単には取り除けそうにもなく、人でもなかった。

「だめです。子供だけでも助けてください。出してください」

「パパ！ママ！どうしたの」

という声を遮断するように扉が閉められた。そして、その男は安全装置を解除すると、スイッチを押した。軽いボンという音とともに、カプセル状の容器は上にあがっていつ

た。機内はさらに爆発が起り、海水が洋次と順子を飲み込むように流れ込んでいった。二人の意識はいっきに無くなって行った。二人の脳裏には竜宮城の景色が見えていた。

潜水艦の艦内には非常ランプが点滅し、警告音が鳴り響いていた。その最中に衝突音が生じて、艦がその衝撃に震えた。

「機関室浸水！」

後部にある機関室より浸水が激しい旨艦内マイクと通じて伝えてきた。コールウエル艦長はマイクを手にとり命令した。普通なら、司令塔内に艦全体の被害状況を通知するシステムがあり、損傷の具合が判明するが、全て動作不能で全く役に立っていなかった。

「至急、被害箇所を報告せよ」

「魚雷発射管室浸水中」

「蓄電池室浸水！ガス発生！」

「左舷機関室浸水の為放棄、防水区画閉鎖します」

しかし、艦の浸水は全体的に急激に増しており、今のところ大丈夫なのは頑丈な司令塔だけであった。しかし、ダメージコントロールが麻痺していることが致命傷だった。大きな浸水の量で、艦はバランスを失い、沈み始めていた。

「艦長！急激に下降中！現在深度100フィート、110」

艦長はこのまま動力が回復する見込みがないため、乗員の脱出を図ることが専決だと決めた。副長に命じた。

「副長！総員退艦命令を出せ！」

艦内に脱出の合図であるピーピー、ピーピーという音が鳴り響き、「総員脱出せよ」と案内が入った。しかし、各部署ではかなりの浸水がひどく、それを乗り越え移動することが困難だった。しかも、一秒一秒深度は増し、脱出は困難であり、深度150フィート以内に脱出することが、人力のできる限界だった。別に20人ほど乗れる脱出艇があったが、全乗員を乗せることは不可能だった。脱出艇であれば、深度500フィートぐらいまでは大丈夫だった。

なにやら副長が電話で話していた。が、その電話も呼びかけに答えなくなった。

「艦長。左舷機関室全滅です。何かと激しく衝突した模様です。なにはわかりませんが、これだけ破壊されるとは、生物ではないでしょう。金属と衝突したものと思われます。それもかなりスピードをもったもの」

「他の潜水艦？」

「かもしれませんが、電子機器が使用不可能な状態だったのでわかりません」

「乗員の避難は？」

「もうじきはじまるでしょう。脱出ハッチに集まっています」

「副長！そちらの指揮をとってくれ」

「艦長は？」

「わしはこの艦の最後を見届ける義務がある」

「ですが、艦長」

「時間は限られる。早く行きたまえ」

「わかりました。艦長の下で働けたことを光栄に思います」

「ありがとう」

艦長と副長は敬礼をして、最後となるであろう別れの挨拶をした。

副長は非常灯がついているだけの暗い中で足早に脱出ハッチに向かった。そこには、かろうじて集まってきた20数人だけがスタンキーフードと呼ばれる脱出用の装具を着て待っていた。

「これだけか？」

サッチ少佐は聞いた。一人が手信号で「そうです」と答えた。もう一人がスタンキーフードを渡たそうとしたが、副長は断った。艦長一人残してはいけないと思ったからだった。脱出口の中はもう3分の一くらい海水が注水されていた。

「無事脱出を祈る」

副長の言葉に、全員が生きる意気込みを手信号で見せた。防水ハッチを副長は締め、ロックをかけた。しかし、悲劇はすぐ待っていた。海水がすぐ満水になり、ハッチを開けて出て行くのだが、そのハッチがその取っ手を二人がかりで回してもびくともしなかったのだ。副長は、生き残ってくれることを祈りながら、艦長のいる司令塔へと戻っていった。中では、どうにもならず、数分の生き延びる時間が刻々と過ぎていった。防水扉を数人が叩いたが、水中ではその力は弱く、去っていく副長の耳には聞けなかった。というより、もう艦内はあちこちで起きている漏水の音が、雑音となって聞こえなかったというのが正しかった。

一方、ライアンは部署に戻るために、移動していた時に衝突の異常を感じていた。その衝突の場所は近かったらしく、よろけたので、両手を使い壁で体を支え、倒れるのだけは

免れた。艦内マイクで機関室浸水を伝えていたので、すぐ救助に向かいかけたが、防水扉が解放されていたので、もう足元には海水がきていた。機関室へと向かう扉に一人の水兵がいた。ジャックだった。半分ずぶ濡れだった。

「ジャック！どうした」

「中に生きている仲間がいます」

「もう、駄目だ。防水扉を閉めろ！浸水を止めなければ、艦が沈んでしまうぞ」

「しかし」

という間もなく、ドーンという音がしたかと思うと、海水が急に増えた。咄嗟にライアンはジャックの手を掴み、引いた。扉を閉める暇もなく、押し寄せる海水に流された。一旦押し流された二人の体は、海水に翻弄されながら、偶然にも後部にあるもう一つの脱出用ハッチの処まで流されていた。それが二人を艦の外へと出す契機となった。先程のドーンという音は、外殻の破損していた一部が降下していく過程で剥がれ落ちた音だった。その穴のおかげで、二人は外へ放り出させることとなった。海水は一気に増えつつあった。もうここから逃れる場所はハッチから脱出することだった。ハッチを回して開けた。上からも海水が流れ込んでいたが、気圧の関係で体が艦外に押し出されるようにすんなりと出た。また、幸運なことにライアンは、中学高校と水泳の選手として活躍していた経験があり、素もぐり三分の記録を持つ選手だった。

（何がなんだかかわからない？）と一瞬頭の中をよぎったが、（外へ出た。早く上に行かない）と思いながら、明るい上へ上へと向かった。右手はジャックの左腕をしっかり握っていた。ジャックも必死になってもがきながら上へと目ざした。艦から放り出された深度は約45メートルだったから、突然受けた圧力は相当なもので、一時は肺が圧迫されるかと思った。そのおかげで、ライアンの潜る能力は半減されていた。しかし、そんなことは気づくはずもなかった。あと10メートル位あろうかという所で息苦しさを感じた。

（ああ、苦しい）

右手で掴んでいたジャックはもうぐったりとしていて、非常に重く感じたが、ガンバレと思いつつ、いや、それは自分にもだったが、言い聞かせながら必死に上った。もう肺が破裂しそうに苦しかったが、あと、5メートル、3、1とついに海上に出た。

ブーッ！とライアンは少し水を吐き、新鮮な空気を何回となく吸った。それから、ぐったりとしているジャックの頭をあげて、揺すってみた。何の反応もないので、顔を叩き、海水を飲んでいるのだと、自分の口をジャックの口にあてて、息を吹き込んだ。だが、何の

反応もなかった。手を首にあてて脈拍を診てみた。静かだった。

「オオウー」

ライアンは悔しかった。

「パパッ！ママッ！」

と中で叫び続ける浩平を乗せたカプセルは、海中を急上昇していき、海面にビヨンと飛び出して、海上に浮いた。カプセル状の容器は、海面に達すると上面横の一部がスライドして空気を補給した。浩平には何がなんだかわからなかった。しかし、突然両親と別れ別れになったことだけはわかった。そして、多分死んでしまったことも受け入れなければならなかった。

(ぼく、一人でどうすればいいの)

浩平は波に揺られながら、涙を流して茫然としていた。が、しばらくすると、ゆらりゆらり揺られて深い眠りに落ちていった。

サッチ少佐は司令塔に再び現れた。

「副長、戻ってきたのか」

コールウエル艦長が司令塔に戻ってきた副長の姿を見て驚いた様子で炒った。中で艦の操作をどうかしようと試みている兵たちもその副長の姿を見た。

「艦長だけを残してはいけません」

「脱出は成功したか？」

「はい、なんとか20名ほどは脱出をしました。が、機関室および後部にいた人員は浸水のため救助できない状況でした。たぶん全員死亡したと思われます。あとは、前部と、司令塔にいる者だけです」

「そうか。バーグ中尉。脱出準備はできたか？」

「はい、艦長。前部脱出ハッチにスタンキーフード装着で待機しています」

「よし、脱出を始めよ。現在の深度は？」

「深度240」

「バーグ中尉、急げ！5分以内に完了せよ。ここの皆も脱出してくれ。よくやってくれた」

艦長は命じた。

「イエッサー。脱出を開始します。前部防水扉閉鎖します」

「艦長、一緒に脱出してください。私がここに残ります」

「いや、私はここに残る。この艦はわたしの艦だ。君が脱出したまえ」

「なら、居候のわたしとしては、残る権利があります」

「君の頑固さは、相変わらずだな」

「バーク中尉！以上だ。脱出を指揮しろ」

「はい」

バーク中尉は、艦長と副長に敬礼をして全員を前部ハッチへと導いた。司令塔内には二人だけが残った。

「副長、君の家族のことをゆっくりと聞こう」

「艦長、二人きりでゆっくりと話せますよ」

バーク中尉は、前部脱出ハッチ付近に全乗員を集めた。数えると丁度30名だった。

「全員、スタンキーフードを装着したか」

「はい」

「ハッチ安全弁解除。ハッチ開放！」

下部ハッチは艦内の圧力調整によりハッチを開けても、艦内に海水が流れ込まないシステムになっている。

「脱出開始！レッツ、ゴー」

次々と隊員はハッチから海中に躍り出た。その間にも、潜水艦は徐々に沈み始めている。特に艦尾の浸水が激しいため、艦首があがり、艦尾が下がった状態になり、脱出するのもバランスをとるのが難しくなっていた。

「よし、あと半分だ。急げ！」

バーク中尉は督促して、さらに急がせた。深度は凡そ300フィートに達していると思われ、脱出の限界に達しようとしていたからだ。スタンキーフードによる脱出安全深度は330フィートだという実験結果を配布され承知していた。そして、最後のバーク中尉の脱出の時を迎えた。

（さようなら。永久の眠りを）

別れの言葉を囁き、艦から脱出した。この深度までくると周りは光が届かず暗い。上を見るとかすかに明るさを感じる。脱出した隊員たちが、上を目指している。躍り出て瞬間から体にかかる圧力を感じるが、必死になって上へあがる。といっても、スーツには空気

層があるので、自然に上昇していくのだが、それ以上に皆あせって必死である。それもそのはず、これほどまでの脱出訓練はしたことがないからだ。皆初めての経験だからである。

ライアンは海上を見渡したが、そこには何も見えなかった。ジャックの首から認識票を外して自分の首につけた。そして、ジャックに別れを告げた。

(天国で安らかにあれ)

ライアンはしかし、途方に暮れかけていた。海上に出たもののこのままずっと漂流するしかないのかという絶望に近い思いだった。しかし、一時間もしないうちにその不安は消えていた。米軍の救難ヘリが飛んできたのである。

ガードナー大尉の飛行艇は、薄くなりかけた霧のなか見事着水に成功して、ゴムボートに近づいた。

「扉を開け！ エスコートしろ」

二人はゴムボートから拾い上げられ、機内へ収容された。

「助かったよ。ありがとう」

大尉は席をたち、二人のもとへ歩み寄った。

「機長のガードナーです」

「ありがとうございます。コナー少尉です」

階級を名乗ったのは、軍服に階級章がなかったからである。

「その軍服はどこで？」

「話せば長くなりますが、米海軍のものですよ。私たちが乗っていたのは、潜水艦バーダーです。爆雷攻撃でやられました」

「他に脱出した人は？」

「いません。われわれだけです」

二人のもとへ暖かいコーヒーが渡された。二人は嬉しそうにそれを飲んだ。

「もう大丈夫です。サイパンまで無事届けますから」

大尉は、副操縦席に戻った。

「中尉！ 帰るぞ」

「はい」

飛行艇は離水し、サイパンへ向け飛びだった。二人は波間に漂っている今まで乗ってい

たゴムボートを見えなくなるまで見つめていた。

浩平は、小さなまどから差し込む陽光に照らされ、眠りから目覚めていた。狭いカプセル状の中でたった一人だったことに気が付いた。もうパパもママもいなかった。

三日前、消息を絶ったセスナ機—佐々木洋次一家が乗っていた—を探すために海上保安庁が巡視艇と哨戒機で捜索をずっとしていたが、その行方はまったくわからなかった。セスナの破片は発見したものの、三人はまったく発見されなかった。海の深く沈んだものと判断され、生きていないと思われ、捜索は打ち切られていた。その内の一隻の巡視艇おおしまが帰還する途中で、乗員の一人が波間に漂う物体を気が付いた。

「艇長！二時方向に奇妙なものが浮かんでいます。ドラム缶のようにも見えますが。なにか漂流物らしいです」

艦橋にいた艇長は双眼鏡でその物体を探した。小さいのでなかなか見つけにくかったが太陽の反射でガラス面がキラリと輝き、かろうじて発見できたが、長年の経験からドラム缶には見えなかった。距離は一^〇ほどのところだった。

「ちょっと、確認してみよう。取舵20度。両舷微速」

おおしまはその漂流物に近づいていった。近づくにつれその形状は、ドラム缶ではないことはわかったが、形は円錐形をしているようで見たことがないものだった。

「なんでしょう？艇長」

「うーん。とにかく近づいて調べてみよう」

その漂流物まで約百メートルになったとき、中で何か動くのが見えた。

「艇長、中に誰かのっているかも知れません」

「そうだな、確認を急げ」

浩平は、ゆらゆら揺れる中で、青い空を眺めていた。これ以上泣いていても仕方がないと思うと、お腹がすいてきたが、当然食べるものはなにもなかった。やることもないし、少し寝そべってみた。2、30分寝たのだろうか。窓から見る太陽は大分西に傾いているのがわかった。もうじき日没だと思うと心細くなってきた。しかし、その太陽が突然現れた影により全く見えなくなった。あっ、と思うとそれは船の影だった。

浩平は、窓の部分に両手を当てるように叩いた。そして、このカプセルの開け方はどうしたらと思い、辺りを見渡した。下の方に赤い字で“開放”と書いてあるボタンを見つけ

た。それを思い切って押してみた。頭部の部分がグーンという音とともに開き始めた。

「後進微速！針路ヨーソロー」

このまま行くと前進の惰性で行き過ぎてしまいますので、後進をかけて行く足を止めて、うまい具合に漂流物の近くに寄せるように操舵していった。あと、50メートルほどに迫っていた。

「中に子供がいるようです」

甲板で待機している隊員が無線電話で艇長に報告する。

「子供がいるって？一人か」

「はい、他に人の気配は見えません」

「タラップを降ろして直ちに収容せよ」

「了解しました」

二人の隊員がタラップを降りていく、近づいてくるカプセルの端を棒状のフックに引っ掛けて近くに寄せた。

「よーし、こちらに手を伸ばして」

一人の隊員が浩平の手をとると、ぐっと引き揚げた。浩平の体は宙に浮き、隊員の胸の中に吸い込まれた。

「一人かい？怪我はないか？」

「うん」

「艇長、無事収容しました。男の子で、いたって元気です」

「おう、ご苦労。すぐ医務室に」

カプセルは離され、二人の隊員はタラップから登ってきた。一人の隊員が聞いた。

「名前は、言えるかい？」

「こうへい、ささきこうへい」

「佐々木浩平君か、さあ、いまからドクターに体を見てもらい、暖かい飲み物でも飲もう」

バグ中尉らは、海上に次々と浮かび上がってきた。最後の姿を見せたのは、最後に出たバグ中尉だった。

「全員確認したか？」

「はい、30人います。あと一つは返事をしないゴムボートです」

「よし、ボートを展張して乗り移れ」

海上にいる隊員たちは助けあって、次々と上に揚った。

「よし、緊急無線を使って救援を要請するんだ」

「イエッサー」

一人の隊員がゴムボートに備えてある密閉式の無線ケースを開けて、送信を開始した。

しかし、送信は異常は見られないが、いっさいの応答がなかった。

「中尉！救援信号に対する応答が全くありません」

「故障か？」

「いいえ、故障ではありません。正常です。何の問題もありません」

「続けてみろ」

一人の隊員が1.2倍の双眼鏡で周囲を見渡していたが、そのうちに何かを発見した。

「中尉！四時方向に船です。帆船だと思います」

中尉はその方向を見た。そして、双眼鏡をその隊員から受け取るとじっくりと見た。

「うん、たしかに帆船のようだ」

しかし、まだ遠くどこの船かよくわからなかったが、ゴムボートには信号弾もあるので救援を依頼することはできると思った。

「おい、ゴメス。民間船の周波数に合わせて通信できるか」

「やってみます」

しかし、何度やっても何も変化はなかった。まったく通信できないのだ。帆船はこちらに近づいてきている。しかも、シルエットが近づいてくると、それは複数いることがわかった。

「信号弾をあげるぞ」

「中尉。大変です。肝心の弾が装着されていません。予備もありません」

「クソッ」

帆船は30分ほどたつと大分近づいて、船籍も判明する処までになっていた。帆船に見張がいれば、われわれを見つけることができるはずだと信じた。

「中尉！あの帆船変ですよ」

「??どうした」

「見てください。米国旗が翻っていますが、変ですよ」

「貸してみろ」

バーグ中尉は、双眼鏡を手に取り、先頭の帆船の艦尾をみた。海風になびいている米国旗を見た。ちゃんとした我が米国籍の船だろうと思ったが、そう言われると、変だった。よく、見ると星の数が少ないのだ。星を数えて見ると31しかない。もう一度数えても同じだった。

「31しかないぞ」

(どういふことなんだ。しかも帆船が四隻もいるなんて)

中尉は、頭の中が混乱していた。帆船は普通練習船として使用する機会が多いが、一隻で航行している場合が今ではほとんどで、四隻もいるなんて見たこともなかった。船の姿も船の側面に外輪があるタイプで、外洋船では見たこともなかった。もう一度、中尉は双眼鏡でじっくりと見た。もう、だいぶ近づき船名が読み取れた。

(サスケハナ)

それは、過去に歴史の時間の中で聞いたことのある名前、そうだったペルー艦隊の旗艦の名前だった。

「ペルー艦隊？」

「臨時ニュースを申し上げます。本日、巡視船おしまは、海上を漂流するカプセル状のものを発見し、中から先日消息不明となっていたセスナ機に乗っていた、佐々木洋次さん一家の長男浩平君を収容しました。容態はいたって元気とのことです。しかし、洋次さんと妻の順子さんの行方はいまだわかっておりません。浩平君が乗っていたカプセル状のものは、どこのものか、まったくわかっていませんが、入港後調査を予定しているようです。また、同じ頃、100キロほど離れた地点で、事故で沈没した潜水艦の乗員一名が救助された模様ですが、詳しい状況は発表ありません」

(完)